

Bulletin 271

2017 秋号



COLONNADE

アーキテクト・ガーデン2017建築祭 報告
第26回 JIA 東京都学生卒業設計コンクール

FORUM

海外レポート／覗いてみました他人の流儀／日本版CABEを考える／温故知新
バックヤードツアー／委員会活動報告／地域会だより／部会活動報告



日本の伝統技術者とつくり上げた壁紙が 上質で個性的な空間を演出する

今号から始まった新コーナー「パートナーズアイ」。協力会員の皆様に取材し、その会社や商品の魅力を伝えていきます。今回ご紹介する株式会社トミタは、1923年、襖紙や掛け軸に使う金欄^{どんす}緞子の問屋として東京・京橋に創業しました。その後、三代目（現会長）が海外のインテリアに着目し、それを日本に広めるため世界中の壁紙を見て回り、現在はオリジナルの壁紙や海外の壁紙、ファブリックス、家具など最上級の商品を取り扱っています。富田^{ひろまさ}互正社長に日本の伝統文化や美意識を世界に発信するために制作しているオリジナルの壁紙「Art Wall LEGEND」への思いをうかがいました。

伝統技術の作り手と協力し 産業をつくっていききたい

日本には素晴らしい素材と伝統技術があります。和紙、金銀箔、それから桐。このような日本の素材を大切に、日本の伝統技術でつくり上げた壁紙コレクション「Art Wall LEGEND」を2007年に発表しました。しかし、市場の主流は早く安くつくれるビニール壁紙でした。同じようなものばかりを作れば、売るのも施工をするのも選ぶのも楽ですが、それがあまりにも増えてしまったため、伝統的な素材は存在すら忘れ去られ、またビニール壁紙以外の施工をできない施工者が増えてしまいました。このままでは日本の本当に素晴らしいものづくりの技術がなくなってしまおうと危機感を覚えました。

着るものも食べるものも、素材や種類、価格など、選択肢は多種多様で好きなものを選ぶことができます。住空間においても新しいチャレンジが求められる時代がやって来たと感じます。

今トミタにできることは何かと考え、イミテーションだから壁紙は使わないとおっしゃる建築家の皆様に改めて日本の素材と伝統技術から作られた自然素材の壁紙の良さを知っていただき、お使いいただきたいと、今年5月に「Art Wall LEGEND II」を発表しました。ご注文をいただいてから一点一点お客様のために丁寧におつくりする受注生産品です。

和紙、金銀箔、桐という日本古来からある素材は、今使われなければ廃れ



通りに面した2層吹き抜けの開放的なショールーム。オリジナルの壁紙など約3万点が並ぶ。

てしまいます。技術を持った作り手と協力して作られる壁紙を産業にすることが、後を継ぐ職人を育て、日本の伝統を継承してくれると信じ、これからも新しいチャレンジをし続けてまいります。

ショールームで 本物の良さを見て触れることが 物作りの第一歩

壁紙は空間を演出する素材のひとつです。それを選んでくださる方ときれいに仕上げてくださいる方なしには、お客様に喜んでいただけません。設計す

る方がどう素材を生かしてくれるか。良い空間をつくるには、壁紙も大切な要素であるべきでしょう。

2016年に新しいショールーム「tomita TOKYO」が東京駅より徒歩5分の京橋エドグランにオープンしました。1階は壁紙やファブリックスなど素材を紹介し、2階ではプロメモリアの家具を中心に住空間を表現しています。インターネットの時代、世界中の情報を画面上で得ることができますが、本物の良さは実際に見て触れなくてはわかりません。ぜひ気軽にお立ち寄りいただき、その質感をお確かめください。



ショールーム tomita TOKYO www.tominet.co.jp

壁紙（オリジナル・海外ブランド）、ファブリックス、家具、ラグを展示。

東京都中央区京橋2-2-1 京橋エドグラン1F
TEL: 03-3273-7500 FAX: 03-3273-7551
アクセス: JR東京駅八重洲南口より徒歩5分、東京メトロ銀座線京橋駅に直結
営業時間: 11:00~19:00
定休日: 年末年始



CONTENTS

COLONNADE

- 4 アーキテクト・ガーデン2017建築祭「社会と共にある建築祭月間」
AGメインイベント(メイン・シンポジウム、委員会サミット、AGパーティー)
イベント報告(講演会、シンポジウム、セミナー、展示、ワークショップ、街歩き、見学会)
- 12 第26回JIA東京都学生卒業設計コンクール2017
スタジオエイチー級建築士事務所 杉山英知

FORUM

- 14 海外レポート 坂倉準三パリ展を訪ねて
坂倉建築研究所 大倉久明
- 16 覗いてみました他人の流儀 小野 朗氏に聞く 音響設計技術により心に響く快感をつくり出す
Bulletin編集WG
- 19 日本版CABEを考える 中野区区役所・サンプラザ地区再整備事業に対するJIA中野地域会の取り組み
白江建築研究所 白江龍三
- 20 温故知新 見る、聞く、考える アイリーン・グレイの映画を見て
平倉直子建築設計事務所 平倉直子
抱負を語る 「何気なさ」に学ぶ
日建設 笹山恭代
抱負を語る 今までのこと、これからのこと
ティオーエス計画工房 高杉政宏
- 22 バックヤードツアー 横須賀芸術劇場
Bulletin編集WG
- 24 委員会活動報告 総務委員会 会員拡大WG
大宇根建築設計事務所 宮地洋樹
- 24 委員会活動報告 広報委員会
エルスト 市村宏文
- 25 委員会活動報告 建築相談委員会
アーキテック パートナーズ一級建築士事務所 柳田富士男
- 25 委員会活動報告 保存問題委員会
加藤建築事務所 加藤誠洋
- 26 委員会活動報告 交流委員会Cグループ
フッコー 杉山成明
- 26 委員会活動報告 交流委員会Eグループ
きんでん 若佐明継
- 27 地域会だより 渋谷地域会
牛込昇建築設計事務所 牛込 昇
- 27 地域会だより 世田谷地域会
アルコ建築設計事務所 柿崎豊治
- 28 地域会だより 千代田地域会
一級建築士事務所Y・Oまち・空間コンサルタント 太田安則
- 28 部会活動報告 住宅再生部会
宇佐美潔建築計画工房 宇佐美潔
- 29 部会活動報告 都市デザイン部会
PAX建築計画事務所 鈴木和貴
- 29 部会活動報告 住宅部会
片倉隆幸建築研究室 片倉隆幸

BACKYARD

- 30 広報委員会HPWG主査 新任の挨拶
- 30 JIA建築家大会2018東京 告知
- 30 支部サイト(ホームページ)リニューアルと説明会開催のご案内
- 31 コラム 風と遊ぶ一ロードバイカー 米田雅夫
- 31 編集後記

ARCHITECTS GARDEN 2017

社会と共にある建築祭月間



開催期間：2017年6月、およびその前後数日

主催：JIA 関東甲信越支部

ARCHITECTS GARDEN 2017では、“建築家の日”6月15日を挟む1か月間、支部全域で、多岐にわたる25のイベントを開催しました。建築家やJIAの多彩な活動・価値を広く社会に対して情報発信することを目的にスタートしたAGも20年に及び、着実に社会、市民に根付き、それが建築文化の普及とJIA・建築家職能の認知に繋がってきていると感じます。

同時に、支部組織再編を受けて、全域でのネットワーク型イベントは存続させるものの、メインイベントは今年度が最後となりました。これまでAGにご尽力、ご協力くださった関係者の皆様、お一方お一方に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

(アーキテツ・ガーデン実行委員長 鈴木利美)

AGメインイベント

2017年7月7日(金)

- | | | |
|-----|-------------|------------|
| 第1部 | 13:00～15:00 | 委員会サミット |
| 第2部 | 15:30～18:00 | メイン・シンポジウム |
| 第3部 | 18:00～20:30 | AGパーティー |

2部 メイン・シンポジウム「建築的思考の可能性」

会場：建築家会館本館1階大ホール

パネリスト：鈴木浩一(トラフ建築設計事務所共同主宰)
齋藤精一(ライゾマティクス代表取締役)
田島直行(代官山T-SITE館長
兼CCCデザインカンパニー執行役員)

モデレーター：今村創平(『JIA MAGAZINE』編集長)

Social innovationが進む時代にあって、建築家職能の展開と可能性を探ろうと、建築家だけでなく、他分野で話題の方達をお招きし、異なる分野にも通底する“建築的思考”をキーにプレゼンテーション、ディスカッションをいただいた。

建築にとどまらずさまざまなプロダクトデザインを手掛ける鈴木氏は、「建築ではないモノをつくる時は建築的な発想で切り返すことを楽しんでいるし、建築をつくる時は建築ではない発想からいくこともある。思考を固めないことが大切」と語った。一方、建築分野からメディア・アートに進出した齋藤氏は、自身の経歴とデジタル領域からまちづくりにも関わる作品をプレゼンしながら、「経済効果を優先するデベロッパーとエモーションを優先する建築家とのギャップは大きい。互いの理解と同時に、中間的立場も必要」と指摘。世界一の企画会社を標榜しているというCCCで全国の蔦屋書店の企画に携わる田島氏は、マーケティングの視点から「蔦屋書店は、新しいライフスタイルの情報提供拠点であり、顧客にとっての最大価値は居心地。そして、人が集まってコミュニケー



ションすることに価値がある」と述べる。

その後のディスカッションでは、齋藤氏が「建築家は分野を超えて学べるし、どんなスケールでも扱える。すべての職業と共通言語を持てるのが建築家だ」と建築家職能・建築的思考の幅広い可能性について力強い言葉。田島氏は「クリエイティブなものが価値を持つ世の中になってほしい。それらは、日本が世界をリードできる分野だと考えている」と創造性について言及。それを受けて鈴木氏は「建築は発展や応用が利く分野だけに、閉じないで開いていくことが重要だ」と経験からのアドバイスを述べた。一方で、齋藤氏から「建築家側にもデータに裏付けられた運営の視点からの提案・計画が必要だ」との指摘もあった。

ここで結論が出るテーマではないが、建築家の創造性と多様性には期待があり、また建築的思考が持つ可能性は幅広い。一方で、異なる分野とのギャップを埋めようとする意識、思考領域の拡大がなければ、可能性は活かされない、と。限られた時間ではあったが、移り行く時代において、建築家がいかに思考し何を行っていくのかということに、大きな示唆を得られるシンポジウムとなったのではないだろうか。

詳細は、JIA HPでのビデオ公開、業界紙記事の掲載をご覧ください。



左から、
今村創平氏、
鈴木浩一氏、
鈴木利美実行委員長、
田島直行氏、
齋藤精一氏

1部 委員会サミット

会場：建築家会館本館1階大ホール

この委員会サミットは、委員会再編を「広く意見を聞き深掘りする」きっかけの場として開催されました。

はじめに藤沼傑支部長より委員会再編主旨として赤字体質改善、人材不足対策、事務局負担軽減、活動状況理解の容易化のためと説明がありました。次に、日々多彩な活動を行っている19委員会のうち、13委員会の活動報告が行われました。

その後意見交換では「委員会再編の前に、大変だが事業活動の整理が先決」「経費はそんなに使わず費用対効果が高い活動を皆行っている」等々…また「若手会員の興味対象外からの脱却」「次世代の興味を引くことが必要で恐れず変化が必要」「県域と支部との活動を整理する」という再編へ向けての具体的な意見がありました。

一方、会場からは「地域会—支部の委員会に翻弄されている」という意見があり、委員会再編は県域地域会に位置付けを踏まえて考える必要があることも明示されました。幹事からは「職能団体として活動しやすい環境を整えられる魅力ある団体を幹事会では目指したい」と再編へのひとつの主旨が明示されました。



説明される藤沼支部長

最後に「県域地域会との連携も視野に

入れ少人数・少予算・事務局負担軽減・活動を効率よく活発化していきたい」と藤沼支部長より総括があり、委員会サミットは閉会いたしました。

今回、課題と目標は見えてきましたが、強い思いで共有できる再編主旨が見出されなかった気がします。そんな中、法人協力会員からの「発足時にあった強い協会が取り戻せれば会員が増える。私はそこを一番期待したい」の一言が心に残りました。



3部 AG パーティー

会場：JIA 館1階建築家クラブ

メイン・シンポジウムの余韻をそのままに「7.7 AGメインイベント」最後を締めくくるのはAGパーティー。スペインvs日本と銘打ち、スペインサイドとしてワイン、JIAのパーティーではお馴染みとなっている生ハムの原木をカットしてのサービス、他にも肉料理やパエリアなどを準備、片や日本サイドはご当地自慢として、支部全域の各県地域会推薦の酒の肴に、東京都内の酒蔵の日本酒数種類を取り揃えました。

シンポジウム登壇者にも参加いただき、前半はシンポジウムの熱気そのままに熱い議論が各所で交わされていました。



シンポジウムの余韻そのままにパーティーがスタート

そして今年度のパーティーいちばんの盛り上がりは、なんといっても建築家バンド (URBAND) による生ライブ。想い出の渚に始まり、襟裳岬のAGバージョン、キャロル・キング、ビートルズまで皆が自然と体を動かし、一緒に歌を口ずさむような素晴らしいライブでした。

楽しいひと時はあっという間に過ぎ、最後は皆さんの温かい拍手により、歴史あるAGメインイベントの幕を下ろしました。



URBAND による生ライブ

講演会・シンポジウム・セミナー

●杉並地域会

2017年度JIA杉並土曜学校 第1回

「建築家の本棚」+トークイベント「私の一冊」

5月20日(土) 会場：杉並区立角川庭園・幻戯山房〜すぎなみ詩歌館〜 参加者：14名

爽やかな五月晴れの中、2017年度JIA杉並土曜学校 第1回を開催することができました。当日は5人のJIA杉並メンバーにより「私の一冊」と題してトークイベントを行いました。角川書店の創立者である角川源義邸の数奇屋住宅を見学しながら、貴重な本との出会いや自身の設計経験談を和やかな中、気軽な質問も交えて、楽しみました。

JIA杉並の若手会員候補が手伝ってくれたのは、今後の活動に大きく前進できる機会になりました。より一層、活躍できる場としてともに作っていただきたいと思います。(中村雅子)



旧角川源義邸
(登録有形文化財)



南方熊楠顕彰館設計コンペの話。その人物像にまつわる書物などを曾根幸一氏と堀正人氏の対談形式で。

●住宅部会

JIA建築家と考える暮らしと住まい「人と環境に優しい住宅とは？」

—少ないエネルギーでも気持ちよく暮らせる住まい—

5月20日(土)

会場：リビングデザインセンター OZONE 7F 住まうとサロン
講師：大川直治(大川建築都市設計研究所)、落合雄二(U設計室)
コーディネーター：湯浅 剛(アトリエ六曜舎)
参加者：8名(一般参加)

「自然エネルギーを最大限活用し、枯渇エネルギーに頼らず、効率よく省エネが実現できる住まい」「再生可能で環境負荷の少ない自然素材を活用した、肌触りが良く、経年変化を楽しめる住まい」「適正な温熱環境により、住まい手が気持ちよく健康的に、そして自分たちらしい暮らしを実現できる住まい」「自然と共存し、愛着を持って住み継いでゆける豊かな住まい」について紹介しました。

高い耐震性能、耐火性能、優れた意匠、スムーズな動線計画や十分な収納。これらも家づくりには大事な要素ですが、快適な温度や湿度を維持できる建物性能、安全な自然素材で構成された温かみのある室内、明るく風通しの良い、自然を感じさせる空間など、やや見えにくい「心地よさ」への配慮が、「人に優しい住まい」を実現します。

また再生可能な自然素材の採用や、施工・運搬方法への配慮、住み始めてからの高い省エネルギー性能、再生可能(自然)エネルギーの活用、メンテナンス性への配慮などが、サステイナブル(持続可能)な「環境に優しい住まい」には必要です。

建物の数値だけで、その住まいの「心地よさ」は判断できません。逆に性能を疎かにしても、気持ちのよい暮らしは実現できません。住む人によってバランスの取り方は異なりますが、まずは敷地のポテンシャルを最大限引き出し、自然エネルギーを上手に活用し、一定の建物性能を確保した上で、



事例1 蔵前の家
(設計：大川建築都市設計研究所)



事例2 目白の家
(設計：U設計室)

住まい手の暮らしに寄り添うデザイン、素材の選定を行うこと、これによりはじめて「人と環境に優しい住まい」が実現できます。

このようなお話をいたしました。

(湯浅 剛)

事例1 都市部の住まい

都市部の住宅は、敷地が狭く、周囲に建物が建て込んでいて、プライバシーの確保さえままならない。そのような場合でも、まずは敷地条件を正確に読み込み、どこから光や風を取り込めるか、どこに開いてどこを閉じるべきか判断することが大切。また近隣建物のサイクルを時間軸として捉え、シミュレーションしておくことも必要である。

事例2 自然素材を活用した住まい

自然素材は、肌触りが良く、経年変化で古びる良さを楽しむことができ、調湿作用もある。また、再生可能なものが多く、製造時のエネルギーや、廃棄時に環境負荷が小さいことから、環境にも優しい。傷がつきやすく、屋外に使うと朽ちていくという問題もあるため、長所・短所を理解して活用することが望ましい。

●住宅部会

アメリカ広葉樹日米建築家懇談会

6月27日(火) 会場：建築家会館本館1階大ホール 参加者：40名

講演(1)「家族の居場所と奥への試み」は、日本側の代表として私が手がけた2つの作品を通して、住宅に「奥」をつくりだすことを南入りの特殊性に関係して述べました。このことに関しましては、敬愛する渡辺武信さんが「奥」を最も緊急に必要としているのは、私なりの表現で「私性の砦」である住宅に他ならないことは明らかだと述べております。

講演(2)「建築材料への畏敬」は、James Cutler氏の講演となり、師ルイス・カーンの話から文化的環境についてのリスクとされた深い思考を述べられました。また森の中に素材のもつポテンシャルを大切にされガラス越しに室内外を繋げていく作品の環境とのハーモニーの美しさに魅了されました。

パネルディスカッションはJames Cutler氏、吉本大史氏、湯浅剛氏、私の4名がアメリカ広葉樹輸出協会の辻隆洋氏の進行にて、

- 1) 米国と日本の建築家の環境建築への取り組み
- 2) 米国と日本の建築家の木質内装材利用に対する考え方
- 3) 日本の建築家に対するアメリカ広葉樹を含む木材製品の情報提供の方法等



を話し合い、環境への配慮や持続可能な社会へ向けて活発な意見交換となりました。

その後、建築家クラブにてレセプションが始まり、和やかな交流の場となりました。挨拶での私のスピーチを掲載させていただきます。

Hello, everyone and welcome.

During the seminar we discussed many issues facing architects on both sides of the Pacific. Your input and ideas will hopefully transform into real-life applications enabling us to better the environment and communities we serve.

As we come to the close of this seminar, it is important for us to remember that a society focused on the environment and sustainability is a society guaranteed to prosper.

Thank you all very much.

(片倉隆幸)

●再生部会

セミナー

保存活用の実例の現場から

6月30日(金) 会場：JIA館1階建築家クラブ 参加者：25名



聴衆の前に語る鱈坂氏

再生部会の公開イベントとして、部会メンバーが実際に設計監理に関わった既存建物の保存再生事例についてセミナーが行われました。副部会長の大橋智子氏、鱈坂徹氏からそれぞれのテーマについて話題提供があり、一般参加者も興味関心を持って耳を傾けていました。

①記憶をつなぐ幼稚園～林雅子設計の幼稚園の再生と改修～ (大橋智子)

亀戸にある林雅子設計の「まんとみ幼稚園」は、1968年、1972年に工事が行われた建物で、竣工後約45年以上が経過しています。しかし、大通りに面して建物を配置し、中庭や、前面道路とのレベル差を利用した滑り台など、魅力あふれる現役の幼稚園です。建てられた当時は、「自由保育実践の幼稚園」としてメディアにも取り上げられ、その建築空間もまた、教育理念を実現した建物として高い評価を得ていました。

こうした名建築が機能更新や増築が必要になった場合に、我々はどうに対処すべきなのでしょう。

大橋氏は、計画当初の実設計図を丁寧に読み解き、耐震補強を行い、竣工後に加えられた柱やエアコン室外機を撤去し、もとの設計理念に近い形で建物を再現させました。薄暗いトイレをガラスブロックを活用して明るくしたり、既存の構造に負荷をかけずに膜屋根を設置して半屋外空間を設けたり、建て主の要望にもひとつひとつ答えています。増築の要望



まんとみ幼稚園の増築された膜屋根

に対しても原設計の意図をくんで、街路沿いに高さを抑えた軒線を大事に守るように配置しました。先達の設計理念を継承しつつ、新たな機能や空間を更新する保存再生手法の一つとして見本となる事例と思われま。

②近現代建築の保存再生事例を考える～竣工時からのオーセンティシティと改築によるオーセンティシティについて～ (鱈坂 徹)

鱈坂氏は、鹿児島大学教授という立場から、2016年4月に起きた熊本地震による熊本の復興状況や取り壊しの危機にある近代建築物、また、パリの日本文化会館で行われている「坂倉準三：人間のための建築」展など、幅広いお話をされました。

特に、熊本市役所花畑別館については、日本で唯一現存する機能主義デザインの戦前通信建築として、設備と構造が一体化した機能的なデザインなど、その保存すべき文化的、空間的価値をわかりやすく解説。熊本市役所花畑別館は、もともと1936年に建てられた通信建築の東京中央郵便局、大阪中央郵便局と同時代同価値の建築です。どちらも郵政民営化の波の中、大部分が解体されてしまいました。この建物の価値はまだ一般的に理解されていませんが、同様の機能主義デザインであるバウハウス(1926年)やファンネル工場(1929年)がすでに世界遺産に登録されていることを考えると、非常に価値の高い建築と考えられます。残念ながら、解体の方針にあるものの、熊本市は解体前に建物調査と報告書を作成することは約束しました。近現代建築の優れた設計理念や空間作法は、一つの歴史的な文化遺産として、少なくとも記録しアーカイブ化して、後世に残すべきと考えています。

(柳沢伸也)

●住宅部会

魅力ある家づくりをめざして —周辺環境や建主との対話を通して—

7月1日(土) 会場：リビングデザインセンター OZONE 7F 住まうとサロン

講師：関本竜太(リオタデザイン)、宮島 亨(V建築設計室)

コーディネーター：中澤克秀(中澤建築設計事務所)

参加者：一般受講者8名

今回のセミナーは、対話形式で、コーディネーターが家づくりの本音を建築家から引き出すことを念頭に進めました。

建築家セミナーにありがちな、作品紹介にならないように、徹底して対話し続けて、素の建築家が見せる新しい挑戦は、受講者にとっても手応え十分でした。



内容は、4つのテーマについて、建築家それぞれの考えている意見を話し合っていきます。答えを求めめるのではなく、多種多様な意見があることを知ってもらい、またその中にも、共通した建築家の姿勢をみてとれるように心掛けました。

- ・周辺環境、敷地、人となり
- ・建主との対話
- ・建築家の持つ普遍的な価値観や視点
- ・魅力ある家づくり

最終的には、愛着を持って長く住み続けるヒントを聞き出し、建築家それぞれの素顔を受講者に見てもらえたと思います。

ビジュアルの写真が数枚程度という、思い切った構成で臨みましたが、受講者の反応は上々で、今後も対話形式を続けていくことで、わかりやすいセミナーとして、進化させていきたいと思っています。
(中澤克秀)

●学生デザイン実行委員会

第26回東京都学生卒業設計コンクール 5月27日(土)、28日(日) → 詳しくは、p.12-13をご覧ください。

展示・ワークショップ

●ミケランジェロ会

銀座プロムナード・ギャラリー展

6月24日(土)～7月8日(土)

会場：銀座プロムナード・ギャラリー(銀座と東銀座間の地下道)

参加者：出展「ミケランジェロ会」会員14名

銀座地下道を通る多くの方が目にできる場所が「銀座プロムナード・ギャラリー」。ここで2週間の展示を行いました。

「ミケランジェロ会」が絵画(水彩、油彩)、写真、書等の展示を行い、建築家協会をアピールしました。今年は14会員が52作品を展示しました。国内・海外の風景画が最も多く出品されました。

昨年秋のスケッチ会は、築地本願寺、聖路加病院、勝鬃橋などのスケッチを行い、今春には上野公園近辺で東京文化会館(前川國男設計)、国立西洋美術館(世界遺産 ル・コルビュジェ設計)などを題材にスケッチしました。
(阿部一尋)



元陽の棚田 (明智克夫)



伊バエストウム/ネプトゥヌスの宮殿
(今井陸之)

街歩き・見学会

●環境委員会

見学会

電力完全自立のオフグリッド建築を体験しませんか？

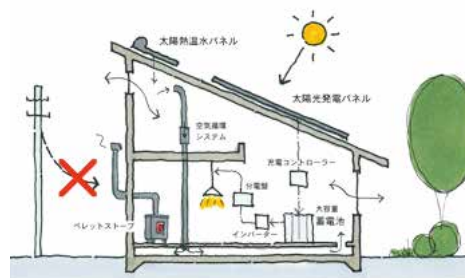
5月13日(土) 第一部 10:00~12:30 / 第二部 14:00~16:30 えねこや六曜舎(東京都調布市深大寺北町)

講師:湯浅 剛、寺尾信子、長井淳一(支部環境委員会)

参加者:9名

オフグリッドとは、電力会社の送電網につながらない独立した電力自給システムのこと。太陽のエネルギーによる発電・蓄電・集熱、木質バイオマスによる暖房、非常時に使える手掘りの井戸など、我慢や特殊な暮らしを強いることなく、化石燃料に頼らない、自然エネルギーだけで心地良く、健やかに過ごせる、オフグリッドの小さな建築(事務所)の見学会です。

午前と午後で開催した見学会には、合計9名の方が参加。広報の期間が短かったせいか、JIA会員の参加者はいなかったものの、建築関係者から一般の方まで、さまざまな方にご参加いただくことができました。建物全体、そして蓄電池などを見学していただいた後、住まいのエネルギー、一次エネルギーと電力、省エネ、オフグリッドの「えねこや六曜舎」のコンセプトや工事過程についてなど、いろいろお話をさせていただきました。参加者からも、たくさんの質問をいただき、オフグリッドや省エネ建築について、いろいろ活発な意見交換をすることができました。(湯浅 剛)



えねこや・コンセプトスケッチ

写真:大槻 茂



えねこや六曜舎の東側外観と、屋根上の太陽光発電パネルと太陽熱温水器



国産材と珪藻土の室内空間

●長野地域会

地域材フィールドワーク 南佐久中部森林組合

6月3日(土) 長野県南佐久郡小海町 南佐久中部森林組合、北相木村、南相木村

参加者:正会員8名 法人協力会員4名

長野地域会では県内各地の山の現状を視察するフィールドワークを続けています。今回は小海町の南佐久中部森林組合と、群馬県に接する北相木村・南相木村で特産の信州カラマツについて見学しました。

はじめに南佐久中部森林組合で、組合の概要や事業内容のお話をうかがいました。技能職員21名の平均年齢が32歳と若く、管轄する小海町、北相木村、南相木村の面積に対する森林の割合は86.3%、管内民有林の人工林率は70%で、そのうち93%がカラマツ林。間伐材の有効利用にも取り組んでいます。

次に北相木村に移動し、山に入り作業の様子を見学しました。特殊な重機を操り女性も活躍していました。その後、南相木村では、法人協力会員の小林木材が材料を納めた建築中の住宅を見学しました。土台、梁、柱と全ての構造材が相木産のカラマツで、その美しさに驚きました。相木村の長くてまっすぐなカラマツ、組合の丁寧な造材、小林木材の手間暇かけた自然乾燥と加工技術、大工さんのこだわり、そのすべてが合わさって価値ある製品になっていると思いました。

今回は参加者が少なくて残念でしたが、今後も県内各地で地域材フィールドワークを続けていきます。(山口康憲)



●中野地域会

沼津・三島をめぐるバスツアー

6月7日(水) 静岡県沼津市・三島市

参加者：42名(区民31名、中野地域会会員5名、東京都建築士事務所協会中野支部会員6名)

一般区民のリピーターも多い、恒例のバスツアーである。中野区役所西側に7:45集合、8:00バス出発。渋滞で東京を出るまで予定よりも時間が掛かる。黒川紀章建築都市設計事務所による足柄サービスエリアで休憩し、千本松原の若山牧水記念館を見学、昼食を沼津魚市場食堂でとり、「東洋一の湧水」、1日約100万トン湧き出すという柿田川湧水群を見て、若林広幸建築研究所によるLaLaGOTENBAを見学。午前中の渋滞による遅れのため、クレマチスの丘にある菊竹清訓建築設計事務所による井上文学館およびベルナル・ビュッフェ美術館は残念ながら省略することになってしまった

が、代わりに旧沼津御用邸を見て、中野区役所西側にほぼ予定時間に帰着して解散。
(小西敏正)



柿田川湧水群



旧沼津御用邸

●城南地域会

第15回城南散歩—品川の大名屋敷跡をたどって

6月10日(土) 品川駅から目黒駅 参加者：21名

4カ所の大名屋敷跡を、東京の都市形成史が専門、また、まち歩きの人でも案内人岡本哲志氏とともに歩く。最初に目指すは「高輪の森公園」。品川駅からシナガワグース(旧パシフィックホテル)横の坂を歩き、右手に曲がりしばらくすると深い緑の公園が見えてくる。江戸時代薩摩藩島津家の下屋敷・抱屋敷、18世紀後半には井伊家の屋敷であったようだ。明治時代に入り政治家後藤象二郎の屋敷となり、その後宮家の邸宅として使われた、とある。隣接する新高輪プリンスも屋敷内に含まれたと思われるが、現在の公園内には小高い丘の緑地があり、滝・流路などの庭園遺構が残される。次に清泉女子大に向かう。新高輪プリンスホテル前の坂を上ると高輪台地の稜線となり、その稜線を南に進む。楨文彦氏設計の住宅などが並ぶ住宅地を抜け西方向に進み谷地近くになると、向こうの斜面緑地上に清泉女子大本館の屋根が見えてくる。谷地を抜けるルートは、案内人ならではの路地・階段ありのコース。

「清泉女子大」の敷地は、江戸時代、陸奥仙台藩の伊達家下屋敷であったが、明治になり旧薩摩藩島津公爵家の屋敷となった。旧島津家袖ヶ崎本邸洋館としてJ.コンドルの設計により建てられ、現在清泉女子大本館として利用されている。煉瓦造2階建の建物で、スレート葺の屋根、列柱廊のバルコニーなど古典様式基調の外観となっている。居住時は1階が公的なエリア、2階は私的なエリアとして使われていた。清泉女子大の敷地は崖地上の高台に、また周囲の住宅地は北側を除き低地にあるため、同大の緑地と建物が景観面で大きな要素となっている。次の畠山記念館へは、谷地側から桜田通りを抜けて向かう。

「畠山記念館」は、昭和初期まで旧寺島伯爵邸(江戸時代は

旧豊後藩藩久留島家下屋敷)であった敷地を荏原製作所創業者の畠山家が購入し、また同美術館は創業者が収集した古美術品を展示公開する私立の美術館で、明月軒などの茶室、園庭が残る。北側に隣接する広い敷地の御殿「白金テラス」もかつては畠山家私邸「般若苑」敷地の一部のようなのだ。

白金テラス裏側の路地上の道を抜け急な坂を下り、池田山公園に向かう。「池田山公園」は旧備前岡山藩池田家下屋敷であった敷地。高台にあり池田山と呼ばれる。明治時代は池田公爵邸として使用されるが、大正末期頃から宅地化が進み庭園部のみが残る。現在は品川区の公園として整備され、回遊式庭園が良好に保存されている。

今回の大名屋敷跡をたどり感じたことは、高輪から目黒にかけて台地・谷地の起伏の変化が思った以上に多いこと、城南地区に残る大名屋敷は下屋敷が多く藩主家族の別邸としてあるいは遊興の場所として使われたようで、そのためか台地の上の展望の良い立地にある。この台地に残る屋敷跡のまとまった緑・施設が、現在においても当地区まちづくりの上で、公共施設整備あるいは景観面からも大きな役割を果たしている。
(宍戸照二)



江戸後期の大名屋敷の位置(岡本哲志氏提供)

●千代田地域会

千代田景観まち歩き —北の丸公園と周辺を巡る建築歴史探訪—

6月24日(土) 九段下集合、北の丸公園と周辺 参加者：20名

北の丸公園とその周辺には、歴史遺産、特に戦争にかかわる歴史遺産が数多くあります。今回の千代田景観まちあるきは華やかさはありませんが、歴史を伝える上で大切な歴史遺産・戦争遺産の建築を巡るまち歩きを企画しました。

当日は梅雨の合間の過ごしやすい曇り空の下、一般市民参加者11名、JIA会員3名、千代田地域会6名、合計20名が九段下昭和館ピロティ（菊竹清訓設計）に集まりました。

九段会館（旧軍人会館）→江戸城清水門から北の丸公園に入り、公園内の石碑を辿りながら「近衛歩兵連隊兵営」の広さを実感してもらいました。

北の丸公園→「東京国立近代美術館工芸館」（旧近衛師団指令部庁舎）→濠の対岸高射機関砲台座跡→千鳥ヶ淵戦没者墓

苑（谷口吉郎設計）を見学、最後に靖国神社諸施設を見ながら靖国神社茶室の外観を見学しました。

メインとなる近衛師団の施設は、現在「東京国立近代美術館工芸館」になっている「旧近衛師団指令部庁舎」を残し建物は失われ、北の丸公園になっています。

当時はイメージするためにあらかじめ参加者に写真や地図を資料として配付して目を通してもらったため、当日の解説がより理解しやすかったようです。

都心の身近な場所でありながら、案外知られていない歴史遺産が多く、参加者も最後まで満足いただける企画となりました。終了後行った懇親会でもさらに質問が出るなど話が弾みました。（大橋智子）



昭和館のテラスで九段会館を見ながら説明を聞く参加者



高射機関砲台座跡



千鳥ヶ淵

photo by T.Kirihara

COLONNADE

●世田谷地域会

世田谷の地域風景資産を歩くⅡ

7月2日(日) 世田谷区池尻～北沢
参加者：40名（一般18名、地域会会員8名、講師14名）

世田谷区内には86の地域風景資産が選定され、風景づくり団体によって次世代に伝える風景づくり活動が行われている。世田谷区のこの独特のまちづくりを広く知ってもらうために、本年度のAGでは世田谷区内、池尻から北沢までにある8の地域風景資産を訪れ、風景づくり団体から風景づくりの説明を聞いた。

8の地域風景資産とは次のとおりである。

1. 池尻稲荷神社を中心とする旧大山道
2. 登録有形文化財の萩原邸
3. せせらぎと絵陶板のある烏山川緑道
4. 大ケヤキのある円泉ヶ丘公園
5. 三宿の森緑地
6. 代沢せせらぎ公園と北沢川緑道
7. 代田の丘の61号鉄塔
8. 北沢地域に隠れている石造物群～茶沢通り（旧二子道）界限～

（青野達司）



池尻稲荷の本殿と神楽殿を背に活動人が街と道の歴史を語る



緑道になった烏山川の上で活動人が話すのは街づくりの歴史



遠藤新設計の登録文化財の萩原邸



国立小児病院の跡地に作られた円泉ヶ丘公園に活動人の解説も熱を帯びて



こちらは法務省の研修所の跡地、緑がいっぱいで住民運動も成果がよく見えてやりがいを感じる



代田の丘の61号鉄塔は日本で一番高い萩原朔太郎の文学碑である

第26回 JIA

東京都学生卒業設計コンクール 2017

展覧会：2017年5月27日～28日
会場：工学院大学新宿キャンパス1階アトリウム



学生デザイン
実行委員長
杉山英知

学生デザイン実行委員会では、東京都学生卒業設計コンクールを主催しています。今年で26回目を迎えたこのイベントは、毎年、多くの学生が参加しており、「JIAの認知度を学生に広げる」という重要な機会にもなっています。

プレゼンテーションが鍵を握る

コンクールは、昨年までは東京都内にある建築系大学のみを対象に行ってきました。しかし、今年から専門学校にも門戸を開き、23大学・2専門学校から合計53作品の展覧があり、5月27日(土)、28日(日)に開催されました。公開審査日の27日(土)は、審査過程を見ようと200名以上の来場者が集まり熱気のある会場となりました。

毎年、審査委員は建築家や建築関係分野の方々5名にお願いしており、今年は審査委員長に富永譲氏、副審査委員長に城戸崎和佐氏、審査委員に江尻憲泰氏、永山祐子氏、羽鳥達也氏を迎えました。審査委員の方々には1日かけて審査をしていただき、金賞、銀賞、銅賞、審査委員特別賞の計8作品を選出していただきました。

審査は大きく分けて3段階あります。午前中を丸々使った「一次審査」、最終審査に進む作品を絞り込むための「二次審査」、各賞を決めるための「最終審査」となります。

このコンクールの最大の特徴は一次審査にあります。事前提出でのペーパー審査やパネル審査だけでの選出ではなく、すべての作品を審査委員の方々に回っていただき、全学生が自分の作品の前で審査委員に直接、作品のプレゼンテーションをすることにしています。各学生の持ち時間は3分と限られてはいますが、この時間内にどれだけ自分の作品のポイントを図面と模型を使ってアピールできるかにかかっています。実際に建築家として活躍している審査委員を相手に、学生がどうプレゼンテーションをするのか、周りで見ている学校関係者やお手伝いをした後輩、来場者は耳を傾けて一緒に聞き入っています。審査委員からは、するどい質問も飛んできます。思いもよらない質問にどう答えるのかも審査の対象となっています。

二次審査では、一次審査で選ばれた作品を対象に審査委員による討論をしてもらいます。一次審査での得票は参考にしますが、それだけで評価はしません。各審査委員が投票した作品を推薦する理由を発表していただき、討論をしていただきます。討論はすぐに終わる場合もあれば、審査委員同士の質問から話が思わぬ方向へ発展する場合があります。この段階で作品数を絞り込み、最終審査へ進む作品を選びます。

最終審査では10作品程度を対象として討論を深めてもらいます。選ばれた作品の模型を一つ、ステージに用意してもらい、その模型を手がかりに各審査委員から質問や良い点、疑問に思っている点を学生を交えて話し合ってもらいます。短時間で審査委員の質問に対して、正確な答えを出すことは難しく、噛み合わないこともあります。この質問から作品に隠された主旨などがわかり、評価が逆転することもあります。

こうした繰り返しの話し合いから、最終的に金賞1点、銀賞1点、銅賞1点を選んでいただきます。また、この賞とは別に全作品を対象として、各審査委員が特に推す作品を審査委員特別賞として決めていただきます。この8作品については、東京都の代表作品として全国の卒業設計コンクールへ出展してもらいます。

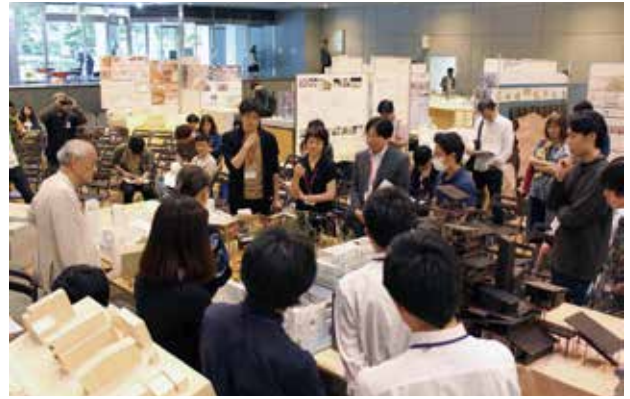


全国コンクール用のポスター

今年度のポスター



審査風景



審査風景



会場風景



審査委員、受賞者との記念撮影

JIA 会員で育てる建築家の卵

審査会の後には、審査委員、出展学生、会場に来ていただいている学生や実行委員を含めての懇親会をささやかながら会場にて開かせてもらっています。ここでは賞を取れなかった学生が、なぜ自分の作品がダメだったのかなどを審査委員の方に聞くなど、有意義な場となっています。また、昨年の25回目を記念して設けた実行委員会賞もこの場で発表させてもらっています。各賞を受賞していない作品を対象に、コンクールの主旨に則している優秀な作品を実行委員の投票で選んでいます。

私たち実行委員会では、このコンクールは、将来私たちと同じ建築家となる学生を育てる場と考えています。そのため、設計事務所や組織事務所などからの事業協礼金と各大学からの参加費のみでまかっています。今までのコンクールの開催のために事業協力をしていただいていた皆様にはこの場を借りて、御礼申し上げます。

多くの会員の方々が誤解をされているようですが、学生デザイン実行委員会では、支部や本部からの予算は一切いただいておりません。そのため、今後の開催のためにも、事業協力にはぜひともご協力くださいますよう、よろしく願いいたします。

このコンクールが今年も開催できたのは多くの方の協力があってこそです。会場を快くお貸しいただいている工学院大学には感謝の言葉しかありません。学内での対応をしていただいている野澤康建築学部長をはじめ、諸先生方に御礼申し上げます。また昨年度より協賛いただいている総合資格の皆様にも深く感謝申し上げます。

そして、お忙しい中審査委員を快諾してくださった5名の審査委員の方には、審査以外にも講評の作成など、いろいろとご面倒をお掛けいたしました。仕事もある中で、ご対応いただき、まことにありがとうございました。

最後になりますが、学生デザイン実行委員会では新規委員の方を募集しています。年末から月に1度程度で委員会を開催しています。会場選びや審査委員の選定、公開審査の運営について等を話し合っています。ボランティアでの活動ではありますが、将来の建築家のために一緒に活動してくれる方がいましたら、ぜひ事務局宛にご連絡いただければと思います。

坂倉準三パリ展を訪ねて



大倉久明

4月末から7月にかけて国際交流基金パリ日本文化会館にて「坂倉準三パリ展」が開催された。

オープニングセレモニーおよびシンポジウムへの参加、展覧会視察、ル・コルビュジエ作品の見学などを含むツアーに参加した。パリでは1937年のパリ万国博覧会日本館の跡地を訪ね、80年前のパリ万博日本館について想いを巡らせた。



「坂倉準三パリ展」のポスター

坂倉準三パリ展について

「坂倉準三パリ展」は国際交流基金パリ日本文化会館の主催により、2017年4月26日から7月8日までの間開催された。坂倉準三の設計関連資料については、坂倉家および坂倉建築研究所により文化庁近現代建築資料館に寄贈され、2013年に同館で「人間のための建築—建築資料にみる坂倉準三」展が開かれた。今回の「坂倉準三パリ展」は、同展資料を中心にフランス国立公文書館資料、ル・コルビュジエ財団資料などを加え、坂倉準三をより多面的に捉える展示会へと発展させたものである。今展覧会用に制作された3D動画や模型、実物家具なども加わり充実した展示であった。

●展示内容

会場構成は、鯉坂徹氏による、プロローグ部、Part1～4各部、エピローグ部から構成され、多くの坂倉準三作品に見られるスロープに触発された斜め方向に配置された壁面により、Z型に各展示部分が分節され、巧み



展示会場風景

な会場構成であった。

プロローグ部：1937年パリ万博会場全体模型

Part 1：Les Années 1930 à Paris/1930年代のパリ

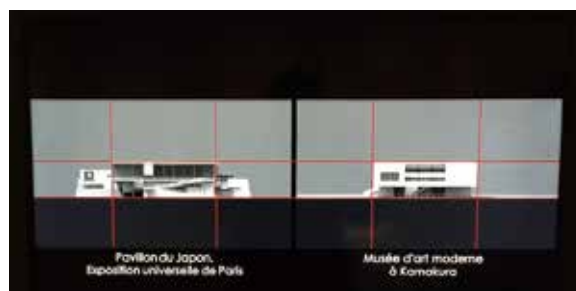
- ・坂倉準三のル・コルビュジエ宛ての書簡
- ・コルビュジエアトリエでの担当作品図面（ソヴィエトパレス、アルジェ計画等）（ル・コルビュジエ財団所蔵）
- ・1937年パリ万博日本館図面（フランス公文書館所蔵）、同模型、1937年パリ万博映像

Part 2：L'architecture en Temps de Guerre/戦争と建築

- ・飯橋邸、高島屋和歌山店、戦争組立住宅等図面

Part 3：Le Musée à Croissance Illimitée/無限成長美術館

- ・国立西洋美術館模型（ル・コルビュジエ財団所蔵 仏文化財）
- ・神奈川県立鎌倉近代美術館（旧神奈川県立近代美術館鎌倉館本館）図面、模型
- ・1937年パリ万博日本館—鎌倉近代美術館の比較3D動画、国立西洋美術館の3D動画



パリ万博日本館（1937）、鎌倉近代美術館（1951）の比較

Part 4：Œuvres Emblématiques du Paysage Urbain

Japonais/日本の都市風景となった作品群

- ・渋谷計画、市庁舎、研究所等建築関連資料
- ・東急文化会館綴帳系サンプル（ル・コルビュジエ財団所蔵）
- ・坂倉準三設計家具（伊賀、羽島各市庁舎所有）
- ・動画「生命線（家具、建築に見られる有機的曲線）」

エピローグ部

- ・渋谷駅周辺スケッチ（1959年・2013年、田中智之（熊本大学准教授）作画）
- ・映像展示神奈川県立鎌倉近代美術館映像など
- ・図面コピー製本

レセプション

「坂倉準三パリ展」の一般公開に先立ち、4月25日にレセプションパーティーが開かれ、我々ツアー一行もレセプションに参加することができた。レセプションには木寺昌人在仏日本大使、杉浦勉交際交流基金パリ日本文化会館館長、磯村尚徳パリ日本文化会館初代館長、今回展覧会実行委員長である高階秀爾氏（大原美術館館長）以下各委員（後述）のほか、坂倉竹之助坂倉建築研究所会長ほか、坂倉準三ゆかりの人々、日仏の建築関係者が集い、華やかながら親しみを感じさせるレセプションとなった。パリ日本文化会館は1937年パリ万国博覧会日本館の敷地に近いこともあり、時間／空間を超えた日仏文化の深い繋がりを感じさせる盛り上がりを見せた。

4月26日 オープニングシンポジウム

展覧会のオープニングに合わせて、「坂倉準三がル・コルビュジエから学んだこと」と題したシンポジウムが4月26日に開かれた。会場は日仏の聴衆で満員となり、坂倉準三に対する関心の高さがうかがえた。シンポジウムは山名善之東京理科



4月26日 シンポジウム風景

大学教授の司会で進められ、山名氏の坂倉準三の活動全般の紹介に続き、高階秀爾氏の基調講演「Autour de “Pavillon du Japon 1937” / 1937年日本館をめぐる」が行われた。ご自身も含めたパリ時代からの坂倉準三とル・コルビュジエの関係からより詳細な日本館の様子についての講演であった。

基調講演に続き、各実行委員による以下内容の講演が行われた。

- ・ 鯨坂徹鹿児島大学教授
坂倉準三の市庁舎・パリ坂倉準三展の構成について
- ・ 萬代恭博氏（坂倉建築研究所）
パリ万博日本館の構成と配置
- ・ 北村紀史氏（魁総合設計事務所）
坂倉準三の家具

なお、展覧会期中盤にはパリで活躍されている田根剛氏（ATELIER TSUYOSHI TANE [ARCHITECT]）と長谷川香氏（東京大学大学院、元文化庁近現代建築資料館勤務）による2回目のシンポジウムが行われ、こちらも盛況であったとのことである。



現在の日本館敷地跡（トロカデロ庭園）のシンボリックな樹木

1937年パリ万博日本館敷地探訪

1937年パリ万国博覧会は、セーヌ川沿いおよびシャイヨー宮からエッフェル塔に沿って伸びる都市軸線を含む、非常に広大なエリアを会場敷地としたものであった。日本館の敷地は現在はセーヌ川右岸のシャイヨー宮（Palais du Chaillot）の足元に広がるトロカデロ庭園（Jardins du Trocadéro）の一部分となっている。実際のその敷地はどのような場所なのかは、私にとって、長年、写真でのみ想像する場所であったが、今回パリ訪問中には数回敷地周辺を訪ね、敷地の高低差、アンジュレーションなどを確認し、おおよその日本館の配置の位置を推定することができた。植栽の現況なども確認を行った。

博覧会配置図と日本館平面図、インターネット上の地図などをスケールを合わせて重ねてみたところ、現地でも推定した日本館配置にほぼ合致するものであった。現地に現存する公園のシンボリックな樹木は、1937年の日本館の写真に見られるスロープの間の樹木と位置がほぼ一致していることもわかった。当時の樹木が現在公園内にあるシンボリックな樹木と同じ樹である可能性が高い。

今回のパリ訪問により、坂倉準三の日・仏両国の近代建築の創成と発展への測り知れない大きな寄与を、改めて実感することができ、貴重な体験となった。



1937年日本館配置図とインターネットの地図を重ねた図

小野^{あきら} 朗氏に聞く 音響設計技術により 心に響く快感をつくり出す



今回お話をうかがうのは永田音響設計の小野 朗さん。永田音響設計は、建築音響設計のコンサルタントとして、国内外のホールの音響設計に携わり、とくに日本初のヴィニヤード型ホールであるサントリーホールは、カラヤンをはじめ世界の音楽家たちから高く評価されています。小野さんも若き日にサントリーホールの音響設計に関わり、その後さまざまな建築物の音響設計を担当されています。

— 大学では建築を専攻されていますが、なぜ音響設計の道に進まれたのでしょうか。

中学の時から将来の夢は建築家で、日大の建築学科に入り、3年生までは建築家になるつもりでいました。4年の時の卒業設計で劇場を選び、音響の木村翔先生に指導していただきました。設計課題は無事終わったのですが、ちょうどその時木村研究室では市民会館のホールの実務設計中で、10分の1模型で音響実験をしていました。自然とそれを手伝ううちに面白くなり、大学院では木村先生の下で研究し、先生に永田^{みのる} 穂 建築音響設計事務所(当時)を紹介していただきアルバイトをするようになり、そのまま就職しました。

— 具体的にどのようなお仕事をされているのですか。

音響設計の花形は、ホールの室内音響設計です。当社が携わっている海外のワールドクラスのコンサートホールは、世界の一流の建築家が設計するので、そういう方たちと一緒に仕事をするのは本当に刺激的です。今は三次曲面での設計も可能になり、デザインの幅も広がりました。我々は、基本計画の段階から音響面のアドバイスをし、コンピューターシミュレーションを使って反響音

の分布などを検証しながら設計していきます。そして最終的に音響測定をして引き渡しますが、さらに運用のコンサルティングまで行うこともあります。

それ以外に、空調設備騒音対策や遮音などの設計もあり、実際はそれが全体の仕事の7、8割を占めます。

— ホールにはどのような形式があるのでしょうか。

国内の公共ホールは、基本的には直方体のシューボックス型が多いです。日本ではどうしても多目的のものを求められますから、プロセニウム形式で、舞台の反射板を組んだらコンサートホール、反射板を外して幕を下ろすと劇場というのが日本のホールの典型です。

サントリーホールは、客席がステージを取り囲むヴィニヤード型。これは客席とステージが近く、臨場感のある空間になりますが、音響設計は複雑になり、またステージの形式を多目的に変更することはできません。ヴィニヤード型ホールは、欧米などには小型のホールでもありますが、国内ではサントリーホールを含めミュゼ川崎シンフォニーホール、札幌コンサートホール Kitaraの3カ所です。

震災後は、避難場所としても使えるように、移動観覧席を採用した平土間のホールを希望する声も多いです。

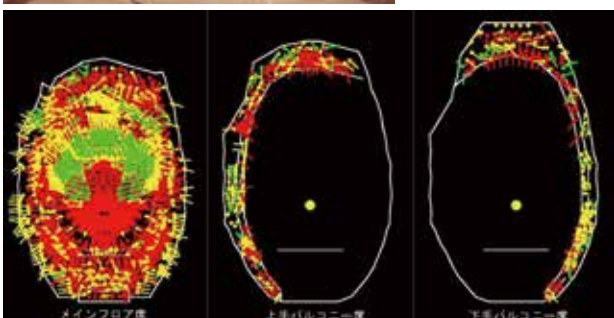
— 建築家がホールを設計する時、その形式(かたち)をアドバイスしたりするのですか。

ホールの基本的な形式を計画当初からアドバイスすることはありません。設計を行う前にプロジェクト策定業務というものがあリ、自治体などが劇場コンサルタントやシンクタンクなどに依頼して調査して決めます。

形式が決まった上で建築家が設計し、我々は音響面でのアドバイスをします。プロジェクトの規模が大きくなると、それだけ音響のウエイトが大きくなり、建築家の方もデザインを優先しようということにはならず、基本的なデザインのコンセプトを崩さなければ、かなり音響の与条件を受け入れてくれます。音響の与条件をさらにデザインに生かそうとする方もいますし、たくさん模型



サントリーホールの
模型実験



コンピューターシミュレーションによる初期反射音分布図
(ミュゼ川崎シンフォニーホール)



ヴィニヤード型コンサートホールのミューザ川崎シンフォニーホール



シューボックス型コンサートホールの紀尾井ホール

をつくってきて、音響的に良いものを選んでほしいとリクエストされることもありました。

—日本と海外では音響設計をするうえで何か違いがあるのでしょうか。

音響設計上意識して何かを変えることはないと思います。ただ、日本人は音に対してとても敏感だと思います。

東京医科歯科大学の角田忠信先生が、日本人と西洋人では右脳と左脳の使い方が違うと書かれています。右脳は音や音楽を感覚的に捉え、左脳は言語を司りますが、鳥のさえずりや風の音を西欧人は「音」として捉えるのに対し、日本人は「言語」として捉えているそうです。風の音を「そよそよ」と表現したりするのは日本独特のもので、そのような感性の違いが、海外で音響設計をする時に役に立っているのかもしれませんが。

日本人は確かに敏感で、レストランや居酒屋、鉄道の駅などをうるさいと感じますが、一方で日本は音環境の基準が整っていないのも事実です。今東南アジアでも新しい駅はだいたい天井を吸音しています。しかし日本では駅などうるさいと言いながら、何もせずそれを許容している。それから日本は学校の教室内の音響の基準がありません。欧米では学校の音響の条件が厳しく、学校をつくる時は必ず音響コンサルが入ります。2年ほど前に建築学会でアカデミースタンダードという教室の吸音のガイドラインがつけられました。教室内もきちんと吸音しなくては、先生の声がきちんと聞こえず理解度が下がると思います。

—そもそも日本と西洋では音の聞かせ方にどのような違いがあるのでしょうか。

日本の音楽の起源は仏の名を唱える唱名や雅楽で、その後江戸時代に長唄や小唄、端唄などの邦楽が生まれました。これらはお座敷で生まれた音楽ですので空間が響

くことを前提にしていません。どれも直接音だけで、それを聞きやすくするための適度な反射音が必要なだけです。一方、西洋ではキリスト教から音楽が発展して、お城や教会など空間が響くことを前提に作られています。ですからそもそも求める音響環境が異なるのです。

—邦楽専用につくられたホールもあるのでしょうか。

歌舞伎座は別として、公共のホールで邦楽を主体にしてつくったのは、蛸殻町の日本橋公会堂(日本橋劇場)、渋谷区文化総合センター大和田の伝承ホール、それに紀尾井ホールの小ホールです。

邦楽を主体にしたホールは、反射音は気にしますが、あまり響かないように意識して設計します。しかし最近では、邦楽も響いた方が評判が良く、奏者の希望で吸音面を反射面に変更したことがありました。やはり響きがあった方が演奏していて気持ちがいいのでしょう。聞き方が変わってきているのだと思います。

それでは邦楽本来の聞こえ方とは変わってきてしまっていますが、海外のコンサートホールで聴く雅楽は、日本で聴く本来の雅楽とは違う聞こえ方になっているのではないかと思います。スタンディングオーバーションで喜んでくれたりする。確かに聞く場所によって全く違う音色になり統一感がありませんが、その楽しみ方は時代とともに変わってきていて、その音楽を支持する人がいればいいのだと思います。

—地方では市民に親しまれているホールも多いです。

以前、石巻の山奥に300席ほどの立派な音楽ホールをつくりました。それが震災で天井と壁が落ちてしまい、山奥のホールですし復旧は2、3年後だろうと思っていました。しかし、震災後1年経たないうちに復旧計画が動きはじめました。市民から、まずホールを直してほしいという要望が上がったというのです。

そこでは、そのホールができたことでコーラスなどの文化活動が生まれ、習慣になっていたのです。震災後その習慣がなくなってしまい、生きがいがなくなってしまったそうです。

そして、そこで大切なのは、これまでの音響がいいホールでないと駄目だと言われたということです。ただ場があればいいというものではありません。またあそこで気持ちよく歌いたいということが大事なのです。

——コンサートホールや美術館は「ハコモノ」と言われますが、これらは人口に対してつくりすぎだったと思いますか。

基本的にはそうは思いません。昔行政を批判するのに「ハコモノ」と言っていました。批判されたとしても完成後にちゃんと使われて役に立っている場合も多いのです。中には本当に使われていないホールがありますが、それは運営側の問題だと思います。使わない方が光熱費などがかからず赤字にならないというのも事実ですが、今では使うようにという法律までできています。

ホールは使わないと何も生まれない本当のハコになってしまいます。やはりその館にひとりやる気のある人がいるだけで全然違うと思います。

——今まで音響設計に携われてきた中で、小野さんに大きく影響を与えた方はいらっしゃいますか。

2年前に亡くなられた久米設計の野口秀世さん。品川総合区民会館(きゅりあん)と一緒にやらせていただいたのがきっかけで、その後野口さんが設計された10以上の公共ホールの室内音響を私が担当させてもらいました。知識に貪欲な方で、音響の話もよく聞いてくれて、ご一緒したプロジェクトすべてがエキサイティングで面白いものでした。2006年には岩手県の「北上市文化交流センター さくらホール」で建築学会賞を取られました。街に屋根を架けたようなガラス張りのオープンな施設で、今までわりと閉鎖的だった日本の公共ホールを変えた建物と言われています。その時の経験が自分の音響設計人生にとっても役に立っています。

——小野さんにとって、音、音響とは何でしょうか。

コンサート主体の室内音響設計に限って言うと、音楽を聴いて素晴らしいと感動するのは「心」で捉えています。しかし、私たちが扱う響きは、心ではなく聴覚、つまり肉体で物理的に捉えているのです。音響は音が発せられた時の物理現象ということです。つまり、私たちの仕事は音で聴覚的な快感を与えることだと思うのです。



北上市文化交流センター

音響学というものがあり、私たちはその理論に基づいて設計する技術者です。その「快感」というものを数値化することを考えたものが室内音響学です。耳で聞いた気持ち良さを数字にするとどうなるのか。その完璧な“ものさし”ができると、どの音響設計者も同じように設計できるのですが、まだそこに達していません。

私たちは今までの経験から、形や素材のことなど、知識は確実に得ていますから、今後“ものさし”の数値化ができて、その技術以上の何かが求められた時に、私たちが必要とされれば嬉しいです。

——建築家に伝えたいことはありますか。

音楽ホールをつくる際は、必ず音楽会を生で感じていただきたい。体験しなければ設計はできません。

当社の創設者である永田は、私が入社した時から芝居や落語、ロックコンサートでも何でも、チケット代と交通費を会社で半分出してくれました。そしてとにかく聴いてくるようによく言われました。聴くのは仕事だということを植え付けられているので、やはり耳で感じて判断することが1番大事だと思っています。

——貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2017年8月18日 永田音響設計にて
聞き手：中山 薫・有泉絵美(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

小野 朗 (おの あきら)

(株)永田音響設計 取締役 プロジェクトチーフ



1956年東京都生まれ

1980年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻科博士課程前期修了。同年、永田徳建築音響設計事務所(現/永田音響設計)入社。現在、同社取締役プロジェクトチーフ。これまでに、ミュゼ川崎シンフォニーホールをはじめ、よこすか芸術劇場、神奈川芸術劇場(KAAT)、紀尾井ホール、福井県立音楽堂、那須野が原ハーモニーホールなどのコンサートホールや劇場の音響設計を担当。

中野区区役所・サンプラザ地区 再整備事業に対する JIA 中野地域会の取り組み



建築・まちづくり委員会
白江龍三

■サンプラザを解体、大型アリーナ(1万人想定)を計画

中野区では、中野駅前にある区役所とサンプラザの敷地を一体化して、高層ビルと大型のホールなどを作る再開発計画を進めている。景観的シンボルが少ない中野区にとって、中野駅前の一等地を大きく占有するこの計画は、今後100年以上にわたって中野のイメージを決める重要な計画だ。

中野サンプラザは故林昌二氏の作品であり、JIAは2014年8月に「中野サンプラザ活用に関する要望書」を中野区長宛に提出し、活用を促していた。しかし残念ながら2016年5月にサンプラザの保存はできないことが決まった。この際、中野地域会ではその後の対応について議論した。選択肢は2つで、ひとつはさらに保存の提案を継続するもの、もうひとつは行政が進める計画をより良くするための提案を行うことであった。協議の結果、行政が進める計画を改良する方向で関わることによって、JIAの存在意義を知ってもらおうということになった。

■「事業協力者」に依存する計画推進

区役所・サンプラザ地区再整備事業は、2011年に策定された「区役所・中野サンプラザ地区整備の基本的方向」によって概念的な要求が整理されている。ここには、サブカルチャーの拠点としての価値や駅周辺の回遊性など主要な課題が記載され、中野の特性をよくとらえた基本方針になっている。その後現在までに2段階で事業協力者が公募され、最終的に選定された提案が最新の計画である。しかしこれはあくまでも区としての正式な施設計画案ではなく、事業協力者の提案という位置付けである。



最新の計画に添付された駅前開発のイメージ図(図版は中野区HPより「野村不動産グループのイメージ図」)

今年度以降に「再整備事業計画」などを策定し、具体的な施設計画は、別途公募による民間参画事業者によって進められることになっている。しかし実際には、現在の事業協力者との作業をもと

に都市計画決定を先行させるスケジュールとなっており、現在の体制での検討が、計画の根幹を決める可能性がある。

公募で選ばれた事業パートナーは野村不動産グループであり、提案内容を見ると、項目立ては全体に網羅的で、地球環境問題対応が手薄なことを除けば、概ね妥当な検討項目が記載されている。しかし添付されたイメージ図は既視感が強いもので、サブカルチャーの拠点として世界に知られた中野の未来を牽引できるようなとは思えない。

■JIAの陳情が採択される

これを受けて中野地域会では、中野区の担当者と面談し、現行の計画案は技術や短期的な経済原理には整合していると思われるものの、文化的要素が弱い旨を表明して意見交換を行い、大いに共感を得た。さらに本年3月には、区長および区議会議員に対して問題点を指摘して計画を補強するための要望書と陳情書を提出した。JIAのこの陳情は多くの賛同を得て採択された。この採択に先立って、全政党派等に説明に回ったが、この際さまざまな議員と意見交換ができて、信頼関係が醸成できたように思う。

■団体間の垣根を越えて

その後の活動を進める中で、「JIA単独ではなく、他団体を含めた建築関係専門家の総意として提案がなされると受け入れやすい」との意見があり、以前からイベント共催等で関係があった建築士事務所協会に協力を求めた。建築士事務所協会は快くこれを受けてくださり、現在は建築士事務所協会から、JIAと連携した動きとして、地域の建築・まちづくり専門家と行政・計画参画者が意見交換できる協議会の創設を要望する陳情が出されている。

新国立競技場や豊洲市場などの経過が影響していると思われるが、行政の中で大型建設案件に対して専門家の意見を求める機運が高まっている。中野区の区役所・サンプラザ地区再整備事業はまだ構想段階であるが、各段階ごとに後戻りできない重要な問題が決まるので、機会をとらえて提案を行っていききたいと考えている。このような積み重ねの中で、日本版CABEの原形のようなものが見えてくるものと期待している。

見る、聞く、考える

アイリーン・グレイの映画を見て

—追憶の E-1027 Villa ~ Carré d'Art—



平倉直子

この夏、かねてより関心があったアイリーン・グレイの映画を試写会で見る事ができた(10月より一般公開)。アイリーン・グレイが設計したE-1027のことはずっと気になっていた。3年前に南仏を旅した際(ニース〜ル・トロネ〜マルセイユ〜ニーム〜ミヨー橋〜アルビー)、ニースまで行くのだからと、電車でカップ・マルタンにあるル・コルビュジエの小屋まで足をのびしたのは、もしかすると近くにあるはずの海辺のヴィラを見ることが出来るかもしれない、という淡い期待があったからだ。しかし期待に反し、案内人に尋ねても答えは無く、見当をつけた道も樹木で覆われているようで、それ以上探求するのをやめた。しかし、小屋に立ち、海の向こうにモナコを眺め、すぐ近く下方にあるはずのヴィラに思いを馳せずにはいられなかった。なぜここに、このような最小の空間を作ったのか、という疑問はさらに増した。

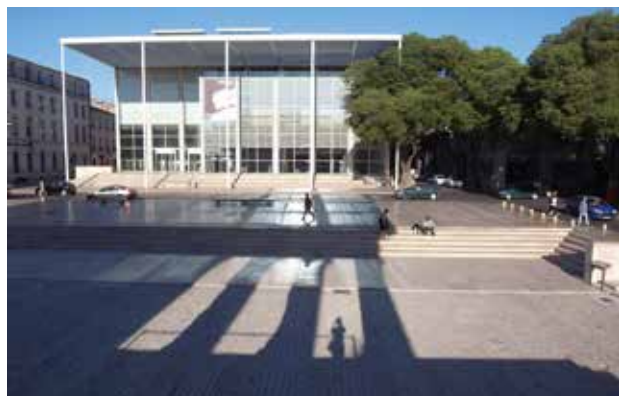
1998年に私が設計した「常盤台の住まい」でのこと、クライアントの鈴木博之氏はノーマン・フォスターのNOMOSを書斎の机(基本設計を固める上で確信に至る重要な家具)とし、竣工時、鈴木杜幾子氏はアイリーン・グレイのE-1027サイドテーブルを居間に置かれた。おこがましいことではあるが、私が設計した空間がこうした家具との出会いにより完結したと思う。空間によってクライアントの考えや嗜好が明らかになることもある。また、私の中に埋もれていたものが、ある条件のもとに表出し、新しい挑戦にも繋がった。こうしたさまざまな体験が、アイリーンへの興味にも繋がっていたのである。

試写会を見て、想像はしていたものの、細部にわたり事実に基づいているかは不明である。アイリーンは設計者であることを主張せず、数年でヴィラを去ったという。もちろん失意のもとで。沈黙し、歴史からも長く消えていた。が、今ここにまぎれもなくアイリーンの作品である、と公にされることは、大変うれしいことである。声高に語らずとも、真実はやがて明らかになる。現在もなお理不尽なことは、こうしたことに限らず、さまざまな場面で起きている。常に自分の思いをしっかりと築き、形にし残すことを選択したこと、ととても共感する。また

どのような状況であっても、ベストをつくすことが最も重要なことであることを、改めて学んだように思う。アイリーンの生きた時代と今とは違いがあるが、自らの人生の時間をどのように使うか、とするなら同じである。

ル・コルビュジエは「私の建築は人々の暮らしを変えた」がアイリーンは「この世界自体を完全に変えた」と言われ、他にも、アイリーン・グレイの考え方が示されている。「家は住む為の機械ではない」(予告より抜粋)、乞うご期待。事実は小説より奇なりというが、この映画も然りである。

また、冒頭の南仏の旅でニームを訪れたのは、常盤台の住まいの計画時にガラスの階段を提案したところ、ご夫妻の共通の体験として、フォスター設計のカレ・ダールのガラスの階段があり、すんなり受け入れていただいたことから、私もいつか訪れて見たいと思っていた。カレ・ダール(近代芸術の神殿)は、ニームの一連の再開発の中心的な建築で、コンペで選ばれ、その後の国際コンペに大きな影響を与えたと記憶している。メゾン・カレ(古代神殿)と対峙するランドスケープも魅力的であった。



手前の影は古代遺跡、一段低い広場を挟み、向き合う新しい建築

歴史的建築物が新しい建築を加えることでその魅力を最大限発揮し、街を活性化した好例である。今、北海道旭川では庁舎の建て替えを巡り、佐藤武夫設計の現旭川総合庁舎を残せないかという動きがあるという。これからは建築も繕い、改修しながら歴史を積み重ねていくことが求められている。環境を意識するなら、現庁舎も残しつつ新しい街づくりに挑戦されることを期待したい。

抱負を語る

「何気なさ」に学ぶ



笹山恭代

プロジェクト固有の問いを見つけるには、スタディの過程でイメージを可視化する作業が重要だと考えています。私の場合チームで目標を共有するため、自らの内部にあるイメージをビジュアル化して外部に出すわけですが、この日常の何気ないプロセスの中で、コンセプトが成熟し、提案が練り上げられていくと感じています。

最近ではコンピューショナルデザインやBIMなどのデジタル技術が進み、複雑な形やプランを一度に多角的に描いたり、既存のコンテキストの情報など、より詳細に設計の中に取り込むこともでき、新しい問いを導くきっかけが増えました。一方で、技術とは無関係の「何気ない自然な行い」がきっかけになることもあります。例えば、クライアントとの打合わせで、一見何の変哲もないオフィスにうかがう時、その平凡な風景の中に、利用者の意見や使い勝手が反映された営みに気づくことができました。ちょうど、古き良き村落を訪れた時に感じるような、住まい手が建物に慣れ親しみ、さりげない隙間の使い方や物の配置などが長年の日々の中でカスタマイズされ、そこで営まれる成熟した行為が雄弁に語りかけて来る瞬間。特定の環境の中で練られた状態は、人間性に深く根ざし、他の環境においても適用可能で、共感を得られると感じました。人間性にあふれた行為に新たなコンテキストを与え、それを新しいプログラムに組み込むと、新旧が混ざり、人間的でありつつ、新しさを持つデザインとなるのではないのでしょうか。問いや答えとなる視点を見つけるには、最先端技術や知の体系に触れ学ぶことの他に、デザインされていない「人々の何気ない自然な行い」から感知する能力を磨くこともきっかけとなるのではないのでしょうか。すでにある建築を超え次の段階へと引き上げるものは、意外なところに潜んでいる気がしています。



桐朋学園大学調布キャンパス 学生ホール

抱負を語る

今までのこと、
これからのこと



高杉政宏

この原稿依頼を受けたことが、建築家としての今までと、これからの考える良いきっかけになりました。

私は30数年前に独立しました。4人のパートナーとの共同経営で、やる気と希望だけではありませんが仕事はあまりなく、経済的にはとても苦しい時でした。しかし、ひとつの仕事を皆でプランニングしたりして刺激し合いながら、貴重で楽しい時間を持てたと思っています。

それから数年して、2人がそれぞれ独立して自分の事務所を構えました(当初より、それぞれ自由に独立していこうと決めていました)。その後、2人が残り、お互いをパートナーとして尊重しながら20年以上継続し、パートナーが60歳になった時に私が今までの事務所を継続し、パートナーが新しい事務所を開設しました。喧嘩別れでもなく良い関係のまま、それぞれの道を歩むことができました(彼がJIAで活動していて、その勧めもあって私もJIAに入会しました)。

この30数年間を考えると、非常に素晴らしいパートナーとクライアントに恵まれ、苦しいこともたくさんありましたが、楽しく活動的な時間を過ごせたと思います。

そして一人になり、あっという間に5年が過ぎました。今では60歳も過ぎ、ゆっくりと楽しみながら仕事をしたいと考えているのですが、相も変わらず毎日バタバタと忙しく過ごしています。まだ、ゆっくりとはさせてもらえないようです。これからも施主に寄り添うと共に、自分自身でも納得のいく建物をひとつでも多く残していたらと思っています。



光が丘の家 居間

横須賀芸術劇場

設計：丹下健三・都市・建築設計研究所

今回からスタートする「バックヤードツアー」は、建物や物事の裏側、裏方を探っていくという企画です。普段見慣れている表側の顔とは違った面を、みなさんにも少しだけ味わっていただけるようにレポートしていきます。

第1回目は、国内最大級のオペラハウスである大劇場が有名な「横須賀芸術劇場」の裏側に潜入してきました。
(『Bulletin』編集WG)



神奈川県横須賀市の京急汐入駅前にある「横須賀芸術劇場」。この劇場は、日本のジャズ文化に大きな影響を与えた「EMクラブ」(旧日本海軍下士官兵集会所)跡地に建設された商業施設や宿泊施設、住居を内包した複合施設「ベイスクエアよこすか」の中にあり、1994(平成6)年にオープンしました。外観は、「EMクラブ」の特徴的な建物である塔状を意識してデザインされたとのこと。外観だけでなく、ホールに「ステージを楽しむ場所」というソフト面での歴史性も継承されていると思います。



横須賀芸術劇場には、大劇場「よこすか芸術劇場」(1,806席)と小劇場「ヨコスカ・ベイサイド・ポケット」(200~574席)の2つのホールがあり、大劇場は馬蹄形の国内最大級のオペラハウスとして知られています。

今回は、横須賀芸術文化財団のみなさんに2つのホールの舞台裏を案内していただき、着工から竣工までのVTRも見る事ができました。なお、事前に、設計をされた丹下健三・都市・建築設計研究所の担当者 木村和弘氏に資料を提供していただき、見学にはこの劇場の音響設計を担当され、今号の「覗いてみました他人の流儀」に登場いただいた永田音響設計の小野朗氏も参加してくださいました。

巧みな舞台ギミックを堪能

まず1階の荷物の搬入口から見せていただきました。事前に資料を拝見した際、3階部分に大劇場の舞台があることがわかり、荷物や大型機器の搬入にどのような工夫がされているのかが気になっていたのですが、早速この疑問から解決されていくことに……。

搬入口のトラックの荷捌場の次に案内されたのは荷物用リフト……と思ったら、このリフト(搬入^きり)自体が3階まで上がって舞台にもなるとのこと。搬入部分がそのまま表舞台になってしまう大胆な方法には大変驚き、私の単純な疑問はすぐにすっきり解決したのでした。

その後、大劇場の舞台がスライドしながら上下および左右に移動し、18×6mもの大迫りが姿を見せるダイナミックな舞台転換など、実際に設備を動かして舞台が動く様子を見学。荷物の搬入や舞台セットの転換など、すべてにおいて無駄なく利用されていることを説明していただきました。この床側の仕組みだけでも驚きですが、加えて天井方向には舞台背景などがバトンと呼ばれる竿状の棒に吊るされ、その数50本。それぞれが上下に動く機能を有していて、背景の転換などの細かな設定にも対応しているということでした。

華やかな舞台を演出するための壮大な裏方の仕組みを体感し、普段は決して立つことなどあり得ない、舞台から馬蹄形の客席を見渡す壮麗な景色は、本当に素晴らしいものでした。

また、舞台の背面に設置された音響反射板は自走式で、コンサート仕様の際は音響効果を最大限に高められる位置に移動し、新たな舞台構成を作り出すとのこと。限られたこの舞台で、床、天井、そして壁とすべての面が最小限のスペースで最大限の効果を発揮するようにギミックが詰め込まれている、とても濃密な空間でした。

他に楽屋などのスペース、照明器具や吊物機構のメンテナンススペースなどを案内いただき、18×19mの本舞台を裏方から支え、作り出し、演出していくために必要な広いスペースを丁寧に案内していただきました。

大劇場とはまた違った魅力とギミックを持つ小劇場も拝見させてもらい、今回の見学は終了しました。

当たり前のことですが、表舞台を支える裏側、裏方の人間的な苦勞ももちろんですが、建築としてのバックヤードの重要さを痛感し、今後の仕事に役立てていこうと思えました。
(長澤 徹)

ヨコスカ・ベイサイド・ポケット (小劇場)



演目によって舞台の形を変えられる可動式舞台機構

よこすか芸術劇場（大劇場）

1階 搬入口



荷捌場のリフト



搬入迫りは上天井部まで上がり、舞台上に①

3階 舞台



舞台上から客席を見る



写真①の搬入迫りが舞台へと上がる過程を見学



舞台の天井部には50本のバトン

2階 楽屋



指揮者などが利用する個室（左）と大部屋（右）



舞台演出装置



舞台後方の照明室



舞台上部も見学

みんなに愛される建物であり続けるために…

私自身、10年ほど前に「よこすか芸術劇場」でバイオリンコンサートやバレエを鑑賞し、音響を含めホールの素晴らしさを体感しています。クラシック音楽、ジャズだけでなく本格的なオペラまで公演可能なホールゆえ、舞台道具などは相当なものとなるそうです。

敷地周辺は国道・駅前広場・幅員の狭い道路と、立地条件から、ホールへの搬入経路に何かマジックがありそう、などと以前から私の中にあったいくつかの謎は、今回のバックヤードツアーで解けました。

1階の搬入口には荷捌場のホームは設置されておらず、トラックの車種に合わせて駐車スペースそのものが下がり、荷台と床の高さが同じになります。奈落にある搬入迫りは舞台迫りでもあり、そのまま舞台のある3階まで上がるなど、上下空間の活用により、限られた平面スペースでの問題点を解決されていました。しかし、この立地条件ゆえに、搬入に対するランニング・メンテナンスコストの増加を生むこととなったようです。

また、本格的なオペラの上演にも対応できるよう、多くの吊物によりさまざまな舞台シーンを実現すべく50本のバトンが用意され、ミリ単位での舞台デザインが可能



舞台上部にある50本のバトン



吊物機構のメンテナンススペース

なコンピューター制御油圧駆動方式にて稼働されています。毎回の公演に支障が出ないよう、この移動装置のメンテナンス頻度も多く、やはりランニング・メンテナンスコストの増加要因です。

集客が期待できる本格的な催しができる半面、ランニング・メンテナンスコストは増加する……維持していくこと・メンテナンス費用の予算確保など、建物をとても愛情を持って運営する公益財団法人横須賀芸術文化財団のみなさんがご苦労されていると思われる点を痛感しました。

引渡し後の建物をずっと愛してもらえるような設計、維持管理のしやすい建物、でももちろんデザインもされている建物の設計を心掛けていきたいと思えます。

(有泉絵美)

総務委員会 会員拡大 WG

「会員相談室」を
ご利用ください

総務委員会
会員拡大WG
宮地洋樹



支部総務委員会の会員拡大WGでは、会員拡大に向けたさまざまな取り組みを行っています。そのひとつとして会員サービスの充実を目指し、これまでになかった会員向け相談室として、ベテラン会員による「会員相談室」をスタートしました。

これは昨今、建築家を取り巻く環境がますます厳しくなる中、身近な相談相手を得る機会が少なく、悩みやトラブルを抱えやすい若手および中堅会員への支援を目的とし、そこにJIAに多数在籍するベテラン会員の豊富な知識や経験を生かしてもらおうというものです。

相談内容は設計監理に関する技術アドバイスから業務上のトラブル対応、設計図面のテクニカルレビュー、事務所運営にまつわる悩みまで幅広く受け付けています。

受け付けた相談に対し、相談員として登録いただいている経験豊富なベテラン会員が、毎回2名体制での直接面談方式により無償で対応します。

昨年度に実施した試行でも相談された方々の反応は上々でしたが、今後は期間を限らず常時相談を受け付けます。申し込み方法は本誌にも同封している案内チラシをご覧ください。支部HPからの受け付けも準備中です。JIA関東甲信越支部の事務局までお問い合わせいただいても結構です。

悩みや問題を抱えた時、まずは頼れる誰かに直接話を聞いてもらうことが解決への第一歩です。相談員も同じJIAの仲間ですから、必ず親身での確なアドバイスが得られると思います。ぜひご利用ください。

案内チラシをご覧ください

総務委員会
会員相談室

JIAベテラン会員による「会員相談室」が始めました

※ 申し込み方法等は案内チラシ又は支部HPでもご覧下さい。

大井 浩樹 1977年度支部副支部長 元、建築家	佐藤 隆夫 1978年度支部副支部長 元、建築家	藤田 隆夫 1979年度支部副支部長 元、建築家	藤田 隆夫 1980年度支部副支部長 元、建築家	三橋 隆夫 1981年度支部副支部長 元、建築家
野村 隆夫 1982年度支部副支部長 元、建築家	野村 隆夫 1983年度支部副支部長 元、建築家	野村 隆夫 1984年度支部副支部長 元、建築家	野村 隆夫 1985年度支部副支部長 元、建築家	野村 隆夫 1986年度支部副支部長 元、建築家
野村 隆夫 1987年度支部副支部長 元、建築家	野村 隆夫 1988年度支部副支部長 元、建築家	野村 隆夫 1989年度支部副支部長 元、建築家	野村 隆夫 1990年度支部副支部長 元、建築家	野村 隆夫 1991年度支部副支部長 元、建築家

広報委員会

会報誌の季刊化と
HPの改訂を中心に

広報委員会 委員長
市村宏文



昨年度より委員会内の改編の準備を進めており、今年度はその実施を始めました。大きくは会報誌『Bulletin』の季刊化と支部ホームページのリニューアルです。

これまでの『Bulletin』は支部活動の報告が主な内容でしたが、活動が活発な現在ではそれらすべての掲載は難しく、また、季刊化により情報のタイムラグが大きくなるために、活動報告は支部ホームページリニューアル後はそちらに移行します。

今年度は従来の誌面内容ですが、次年度からは情報を得るような読み物として変わっていきます。

支部ホームページもこれまでの掲載内容を大きく変え、改訂後は支部活動の情報発信源となります。活動の告知から実施後の報告までをサイト上でを行い、それらは全て支部ホームページ上で公開され、どなたでも見ることができます。それにより常に新しい情報の掲載が可能になり、地域会・委員会の活動がオープンになります。

広報委員会は毎月1回開かれています。委員会内に『Bulletin』編集WGとホームページWGの2つのWGがあります。それぞれ個別に開かれ、そこでは詳細な内容について議論が交わされています。委員は入会后1~2年と比較的若い会員が多く、新鮮な視点からの新しいアイデアを出しながら活発に活動をしています。

広報委員会では常に委員・WGメンバーを募集しています。広報活動、誌面作り、サイト運営などに興味がある方はぜひご参加ください。



広報委員会の様子。テストページを確認しながら新しいHPづくりを進めています。

建築相談委員会

設計と相談をつなぐ 建築家として

千葉相談室 室長
柳田富士男



今年から千葉相談室室長になりました柳田です。

JIA千葉では、建築4団体主催の卒業設計コンクール「建築学生賞」や、建築6団体の研鑽・交流となる「建築展」の幹事を務めてきました。「建築デザインという本業でリードできる」企画業務から、相談の大半を占める建築トラブルを抱える市民に、「法律の解釈を掲げて助言する」相談業務が務まるか、やや不安です。

4月から始まった「民事調停業務」でも、「建築相談の壁を越えた」さまざまな難しいトラブル」を学ぶにつれて、「設計・施工＝つくる側の論理」から「一般市民＝使う側の論理」にシフトして考える必要性を実感します。かといって安全第一、失敗を恐れて良い設計はできないし、設計へ良いフィードバックができるか模索しています。

まだ日が浅い中ですが、相談委員会としての課題はやはり一般市民へのアピール、行政をはじめさまざまな相談機関がある中で、JIAならではの、建築家ならではの解決への的確な助言を行い、そのことが広く認知されることでしょうか。建築に関して「困ったときの頼れるJIA」一委員会としてもHPを通じたPR等を検討しています。

JIAに入って20年、今までは各種イベントへの「参加者＝お客さん」であったことに反省を込めて、独立後は「牽引するリーダー」の任を受けて、改めて、個人～人に支えられる立場「抛り所JIA」を実感しています。

一言に建築相談と言っても、「良い住宅を創るにはどうしたら良いか」という本業に近いポジティブなものから、「雨漏りは設計か施工か、住み手の問題か？」という瑕疵責任という悪く言えば犯人捜しのようなネガティブなものまで多岐にわたります。いずれのケースにせよ、良きアドバイザーとして、相談者の信頼を得るということでしょうか。初心忘れずとは言いますが、肝に命じて、設計、JIA活動に関わっていきたいと思います。

保存問題委員会

保存の問題再認識年

保存問題委員会 委員長
加藤誠洋



「問題」が付いている委員会なんてそうそうないでしょう。保存問題委員会は、建物の「保存」に関する「諸問題」を扱うのでそんな名前が付いています。

「問題」のひとつは、失われそうになっている建造物をなぜなくしてはいけないのか？ということ。歴任の委員すべてが、この問題に対し真摯に委員会を運営されてきました。しかし、長年の活動はルーティンワークになってしまうこともあります。

近年の委員会において、議題に上る建造物をそのまま「問題」にして、要望書への段取りを進める傾向があったことは否めません。その反省を込めて、今年度、我々は保存問題の“問題”を再確認するための議論の場を設けました。それは、これまでの活動を否定することではなく、これからも「保存問題」に対峙し、「建築家こそ」が取り組むべき課題を明らかにしていく取り組みです。

毎月開催していた委員会を3ヵ月に1度にしたのも、これまで毎回要望書提出のためだけの話し合いになっていた会議に変化をつけるためです。次の会議までの2ヵ月を、保存問題について委員同士フリートークをし、考察を深めることに当てています。例えば要望書提出の対象とするべき建造物にとっての価値(学術的のみでなく、社会を視座に捉え「市民に愛される価値」を積極的に取り入れること)や、委員会の性質上公にできない情報も多いため活動が閉鎖的にならざるをえないのを、開かれた委員会にするための模索などに時間をかけた意見交換ができるのも今までにないことです。

活動を通して、それら試みがこれからの委員会活動に繋がればと考えています。



新国立競技場建設現場をバックに委員会新旧メンバー

交流委員会 Cグループ

JIAの活動を通して

交流委員会
法人協力Cグループ副代表幹事
フッコー
杉山成明



当社がJIAに協力会員として入会し、20年ほどが経過したかと思います。そして私が前任者より引き継ぎ、早2年程度が過ぎました。現在は、グループ副代表幹事、C、Dグループゴルフコンペ幹事、フレンズカップ委員を担わせていただいています。

普段、我々は建築家の方々とプロジェクトへの営業活動を中心にお付き合いをしております。自社製品を「この条件ではこれが良いです」「ここにはこれが良いと思います」などとお勧めし、建築作品のひとつひとつに納めています。建築家の方々は制限された条件のもと、日々刷新される技術や製品を駆使して建築作品を作り上げていきます。我々は「メーカー」という立場において、最善の策を練り、建築家のイメージに合った製品をご提供します。それは建築作品を構成する小さなパーツではありますが、なくてはならない存在でもあると考えています。

JIAでは「正会員」と「協力会員」という会員の区別がありますが、ともに「会員」という同じ立場での交流を基本としています。この「交流」こそが(大袈裟ではありますが)素晴らしい建築が生まれる一端を担うものであってほしいと思いつつ、今後もJIAの活動に協力して参りたいと思います。



C、Dグループゴルフコンペにて
左から、藤沼支部長、協力会員の佐藤さん、土屋さん

交流委員会 Eグループ

施設見学会報告

交流委員会
法人協力Eグループ代表幹事
きんでん
若佐明継



今年も恒例のEグループ主催の海上からの施設見学会を7月26日に行いました。今年は天候が不順であったため、開催日の天候が気になりましたが、当日は雨や強風とはならず、無事開催できました。

今回は、いつも出席していただいている皆さん(正会員の方)やEグループの会員の方たちに参加していただき、毎回同様、有意義な交流を行うことができ、参加者の方たちに感謝しています。

ただ、残念なことです。年々少しずつ参加者の数が減ってきて、屋形船の席にも隙間ができてきています。他のイベントなども同様なことがあるかと思いますが、何とか参加者を増やす努力を行い、この会を盛り上げていきたいと思っています。

今年も例年のように、船の中での美味しい江戸前の天ぷら等の料理に舌鼓みを打ちながら、皆さんが持ち寄った景品の交換会等、楽しい時間を過ごすことができました。また、新しい会員の方たちの参加もあり、年ごとに変化していく風が吹き込まれることも良いことでした。

このような毎年行うイベントを長く続けていく努力と、何か変えていこうとする力により、今後もこの会だけではなく、JIA全体としての発展や、何か参加者の皆さんの力になることにつながればと願っています。

最後に、今年もこの会に参加していただいた皆さんに感謝するとともに、毎年屋形船の予約や会運営のために尽力されている会員の方たちにお礼を申し上げ、報告とさせていただきます。



毎年恒例の屋形船での交流会

渋谷地域会

渋谷地域会の 活動報告



渋谷地域会 幹事
牛込 昇

デベロッパーから建築家へ転身して10年を機に、JIAに入会し4年の年月が過ぎました。入会当時の私は、たとえ10年を経ても受注の伸び悩みや事務所運営など、「どうすれば建築家としてまともに食べていけるのか」という不安で一杯でした。渋谷地域会との付き合いは、南條代表から2013年新春の榎文彦特別顧問の講演会のお誘いを受けた時から始まりました。今は地域会諸先輩方のおかげで不安も徐々になくなってきています。

地域会では「街歩きトレッキング」「作品発表会」「新春講演会」等々のイベントを催し、会員・会員以外、分け隔てなく参加いただくことで少しでも地域会や渋谷の街に興味をもってもらい、参加者も新規会員も増えることを期待し活動を行っていましたが、2014年より参加者が得をするための強化イベントとして「学ぶシリーズ」「話すシリーズ」という切り口で会を開催しています。「学ぶ会」は各種の専門家やメーカーを招いて知識・技術を習得する会。「語る会」は1人の建築家にクローズアップし、幼少時から現在までの布石を通じて哲学などをディスカッションによって掘り下げる会です。また昨年「CHIT-CHATting !!」を年2回行っています。毎回、発表者(20人程度)がパワーポイントを使って写真10枚を1枚あたり20秒、計200秒で説明するというプレゼン会で、内容はなんでも可(作品発表・自己紹介・旅行や料理の話・好きなもの・自慢の品…等々)として職業を問わずいろいろな方々に参加いただき、大変盛り上がっています。

また、会友の力を借りてホームページもリニューアルしました。デザインやアクセスのしやすさの改善によって学生も地域会に参加してくれるようになっています。



昨年からはじめた「CHIT-CHATting !!」の様子

世田谷地域会

11年目となった 空間WS



世田谷地域会 代表
柿崎豊治

世田谷区内の小学生との空間WSも今年で11年目となった。最初にWS(ワークショップ)に参加してくれた子どもたちはすでに成人式を迎えているし、延べ参加人数は1,000人を超えている。会にとっての一大プロジェクトと言って良い。

角材と輪ゴムのみを用いて立体を構成する体験を通じて、子どもたちにもものづくりへの関心を持ってもらおうと始めた活動だったが、しだいに建築・まちづくりについても触れるようになってきた。ここに道がある、ここは広場になっているなど条件も付けるようになり、複雑な設定にすることもあった。

小学生も高学年になれば子ども扱いもはや適当ではない。感覚的に良いものを感じさせる子もいるし、ネットを使って立体構成の知識を得ている子も見受けられる。テキパキ考え、WSに、あるまとまりをつけるべく動いている子もいた。

このように観ている私たちはファシリテーターと称されて、本来はWSの道筋を示す役割と理解しているが、こちらから伝えておきたいこともたくさんある。子どもたち相手のこととはいえ、その気で向き合えないとこちらの言葉も伝わらない。その思いから、つい多くを語りすぎて子どもたちから浮いた状況になってしまうこともある。複雑な建築・まちづくりについて分かりやすい言葉で伝えることは容易ではない。実はこちら側のプレゼン能力が問われているともいえそうだ。この夏も汗まみれのWSだったけれど、子どもたちに何か伝えられたらどうか。



2015年 世田谷区庁舎ケヤキ広場での空間WS

千代田地域会

地域貢献活動と JIA会員の交流と

千代田地域会 代表
太田安則



2017年度の活動は、アーキテクト・ガーデンから始まり、8月初旬には、会員の縁故を手掛かりに、山梨地域会との夏の交流会を実施しました。8月6日は、宮光園を見学し、ぶどうの丘会議室で意見交換会の後、展望レストランで懇親会。7日はゴルフ組と散策組(建築巡り)に分かれ、ポール・ラッシュ記念館で落ち合いました。帰路となる韮崎駅に向かいましたが台風で中央本線が不通となり、山梨地域会の方にお世話になり甲府まで移送してもらいました。そこから身延線で東海道に抜け、東京にたどり着く思い出深い夏の交流会でした。山梨地域会の皆様、本当にありがとうございました。



甲州市近代産業遺産宮光園にて

●「建築家の地域貢献活動展」

期間：8月29日～9月1日

場所：日建設計東京1階

地域会会員の日建設計のご厚意で、地域開放の催しに合わせ、日建設計ギャラリーで開催しました。

●出前授業「課外学習まち歩き」

開催日：10月3日

富士見小学校の3年生を対象に「凸凹たんけんまちあるき」を実施しました。



この秋号の配布される頃、10月26日～28日には、「千代田区を舞台とした学生設計展」と千代田地域会の活動報告が日本大学理工学部駿河台校舎1号館4階のギャラリーで開催されます。皆さま、ぜひお越しください。

住宅再生部会

住宅再生の ハードとハート

住宅再生部会 部会長
宇佐美潔



国土交通省が熊本地震の検証を終え、2000年以前に建てられた木造住宅の接合部の状況確認を推奨している。木造住宅の再生はどこまでやるのか範囲が明確になりやすく、予算によってその範囲が制限されてくる。しかし今は耐震補強を第一の目標にして住宅再生を提案することが必要と考える。

今年の部会活動は、例年の①講師を招いてのセミナーで深く知る、②研修活動で直に建築に触れる、に③研究活動で耐震補強を活発化する、が加えられた。その目的は木造住宅の耐震補強に必要な、心得ておくべき基礎的な知識や新しい基準、工法、素材、コスト等々の習得とその現場を知ることである。木造住宅の耐震補強は、個人の安全・資産・暮らしを守るだけではなく地域の安全に寄与し、小さなコミュニティの核にもなりえる。

私は2010年に空き家になりかけた築50年を超える実家に事務所を移し、2011年3月11日の大地震を経験した。予算を捻出して2014年に実家の耐震補強を行い、近隣の方々のコミュニティの場としてシニアカフェを月に1回開催。今年の9月で第24回目となる。栄養士・訪問看護師・介護予防機能訓練士・ピアニスト・ケアマネが参加して食事と栄養の知識を伝え、「が」や「た」抜きで歌ったり、ゲームをしたり、口と頭と手をフル稼働する。ティータイムで皆と楽しくおしゃべりして明日の活力を蓄え、元気になって次回を楽しみに帰っていただく。ここに一役買っているのが、馴染みやすい昭和感あふれる住宅の佇まいであることは間違いないと感じる。住んでいた人の思いを再生して次の何かに繋げることも、住宅再生の大事な仕事と、この頃思うようになった。



ボランティアメンバーと笑顔でゲームに夢中

都市デザイン部会

UDツアー 2017

都市デザイン部会 部会長
鈴木和貴



都市デザイン部会恒例のUDツアーは、毎年季節の良い時期に、関東近県の話題の建築やスポット、伝建地区や登録有形文化財などを部会員の皆さんと巡る研修旅行です。時には所有者や管理団体からお話をうかがい、また設計担当者から解説をしていただくこともあり、個人ではなかなか見学する機会のない場所を訪ねるツアーでもあります。そして、このような稀有な機会を享受するだけでなく、部会員同士の交流と親交を深められることも大きな特色です。

今年は関東近県を離れ、前部会長の鯨坂徹さんが鹿児島大学大学院に着任され4年となることから、彼の鹿児島での研究の一つの「麓^{ふもと}集落／鹿児島島の歴史的集落」の見学と解説をお願いし、合わせて近・現代建築を訪ねる2泊3日のツアーを企画しました。

5月26日の朝、鹿児島市内のホテルに集合、総勢25人、貸切バスで薩摩半島・大隅半島を廻り、28日の夕方、鹿児島中央駅前での解散まで、共に「まち」を歩き、空間を体感できたことはかけがえのない経験でした。さらには、自身で感じたことを同行の諸先輩に問い、意見をうかがうことができたのはJIAだからこそです。その意味では、大変贅沢なツアーといえるかもしれません。

1998年6月に、第1回のUDツアーとして、当時はまだ伝建地区に指定されていなかった群馬県の六合村（現：中之条町六合赤岩）やハツ場ダムで水没してしまう川原湯温泉街などを訪ねました。次回の2018年は第20回のUDツアーとなります。記念の回として、今から訪問地の検討をしているところです。



肝付町・長坪保安退避室（1968／池辺陽）前にて

住宅部会

今年度の部会活動

住宅部会 部会長
片倉隆幸



1. 住宅部会の日について

昨年度は、建築家の職能を真正面から捉え、積極的に社会における建築家の役割について考えてきました。今年度も部会の日企画は、建築家の役割について幅広く部会員相互の魅力と生き方を伝えていけるような職能サロンを企画しながら活動しております。

4月、建築家・渡辺武信さんが『住まい方の思想』の中で繰り返し語る「私性」とは何を伝えようとしてきたのか。生活を捉える優しく鋭いまなざしと生き方に郡山毅さんが問いかけました。

5月は職能と報酬等。6月は「建築家×旅」、建築家にとって旅からの教え。7月は40代で建てた「自邸&アトリエ」巡り。8月は長野県の風土に根ざした「松下重雄さんの建築と生き方」を信州諏訪にて。9月は斎藤孝彦さんをお招きして「建築家のプロフェッション」のお話を建築家クラブで予定しております。

2. 公益活動（市民向け）

今年度のセミナーは、OZONEとLIXIL隔月の開催にて、それぞれ年間6回、計12回となりました。客観的な立場の建築家の視点により、OZONE、LIXILの担当者からも高い評価をいただいております。

また不定期ですが、JIA市民住宅講座「街歩き」を開催し、歴史的な背景を前提に「まち」や「建築」の成り立ちについて紹介しています。昨年よりWGで検討を重ね、今年度のセミナーでは「持続可能な住まい」や「建築家の職能」「建築家のデザイン」などを共通のテーマとして、情報共有をしながら発信を続けております。



2017年4月21日（金）住宅部会の日「武信さんに聞く」

新任の挨拶

支部サイトの
リニューアルに向けて

広報委員会 HPWG 主査
中澤克秀



今年度より広報委員会HPWG主査に着任しました中澤克秀です。よろしくお願いいたします。

実は、10年前にJIAに入会と同時に支部広報に入り、副委員長を4年務めました。その後、本部広報委員を4年務め、やれやれ、ようやく広報の呪縛から解き放された、喜んでたのもつかの間、前任者の高橋広報委員長より声をかけられ、戻って来た次第です。

その目的は、支部サイトの全面的リニューアルの実現です。思えば、前回のリニューアルも責任者でした。当時は想像もできなかったスマホ時代とすっかり世界が変わりました。情報社会の中で、いかにシンプルにJIAを知っていただけるか、広報委員会内で議論を重ねて進めています。

新しくリニューアルされたHPの公開を、会員の皆さま、楽しみにお待ちください。
(中澤建築設計事務所)

告知

JIA 建築家大会 2018 東京

9/14(金) — 15(土)

来年2018年9月14日～15日に開催される「JIA建築家大会2018東京」。

藤沼支部長を委員長として2018全国大会実行委員会が設置され、5月の第1回委員会からすでに5回(9月時点)開催し、議論を重ねています。委員は関東甲信越支部の地域会(港、世田谷、千葉、群馬、長野、茨城、新潟、城南)と常任幹事で構成しています。メインテーマは概ね確定し、大会プログラムのイベント等の企画を協議しています。

本大会は、同年9月10日～14日に開催されるACA18 Tokyo (ARCASIA東京大会)との連携も協議しています。JIA会員のミーティングやパーティへの参加、ARCASIA参加建築家のJIA建築家大会への参加と、相互にできるような企画も進められています。

次号の『Bulletin』冬号では大会の概要を紹介いたします。

(2018全国大会実行委員会 広報部会)

支部サイト(ホームページ)リニューアルと説明会開催のご案内

広報委員会では現在HPWGメンバーを中心に、支部サイト(ホームページ)のリニューアルを進めています。

新サイトではJIAから積極的に情報発信する形に大きく変わります。地域会、委員会、各種イベント・セミナーの告知、その後の報告を関係者・主催者がホームページに直接アップし、それぞれの活動がひと目でわかるようになります。これにより、今まで会報誌『Bulletin』でしていた活動報告を新サイトに掲載していただくことになります。

新サイトの使い方、告知・報告の掲載方法についての説明会を、今後数回開催する予定です。

第1回説明会を下記日程で開催いたします。新サイトの初公開になりますので、特に地域会、委員会の担当者はご出席ください。

●支部サイトリニューアル第1回説明会

日時：平成29年11月9日(木) 16:00～

場所：JIA館

※出席される方は、支部事務局までご連絡ください。

■出席の連絡先

JIA 関東甲信越支部事務局 大西

E-mail: mohnishi@jia.or.jp

TEL: 03-3408-8291 FAX: 03-3408-8294



現在製作中の新しい支部サイトのトップページ(仮)

風と遊ぶ

—ロードバイク—



胆石の手術がきっかけで57歳でロードバイクに乗るようになりました。不摂生がたたり20代に比べ25kg以上体重が増加し、現場の足場もお腹がつかえて登れなかったり散々でした。ロードバイクは楽しみながら減量できそうだと思い込み乗り始めたのですが、低下した体力が回復するまでは苦行以外の何物でもありませんでした。まず仕事前の時間を使って走ることになりました。

主なコースは利根川の河川管理道路を整備した自転車専用道です。みるみるうちに体重が下がり始め、一種の中毒症状になり毎朝30km走りました。鉄道を使つての輸送も新たな世界です。見ず知らずの土地の景色を楽しみながら、のんびり移動します。

それまでは前橋という地方都市で暮らしながら職場と夜の徘徊に明け暮れていたため、自然環境はまったく頭の中の観念の世界になっていました。ロードバイクは自らの体力で100km以上の移動が可能です。きつい坂道あれば強い季節風、砂塵、日

照、降雨、降雪、そして高低温に直に晒される、文字通り自然を肌で感じられる世界です。

20km/h程度で走るとなげなく道端で気がつく季節の草花の変化も楽しみです。諸葛菜や菜の花に始まり桜、ニセアカシヤ、野茨、矢車菊、木槿、百日紅、そして紅葉。季節の移ろいをはっきり体で感じられるようになりました。道ばたに暮らす狸や野うさぎ、烏や山鳥、雉、蛇に蛙。これらとともに生きていることも思い起させてくれます。

住宅設計においても環境性能がとくに重視されるようになりました。その中でも外皮性能に関心が集まっています。しかし外皮とは屋外と屋内の単なる区切りに過ぎません。もともと日本では明快に区切る習慣はありませんでした。

改めて自然のなかで生きる生物としての人間の存在を考えるきっかけになりました。

「微気候」という言葉もすつと胸の中に入ってきます。

(米田雅夫)

芸術の秋ですね

編集後記

- 先日すみだ北斎美術館で富嶽三十六景展などの特別展があり、NHKでは北斎親子の江戸の生活が再現され、興福寺中金堂再建記念の運慶展、安藤忠雄展、まさに芸術の秋がやってまいりました！ (立石)
- 「快感を数値化」する永田音響設計小野氏に芸術を感じました。私は芸術より食欲。秋の音で、さて1杯。 (中山)
- 音響話、劇場ツアーと今秋は音楽？と思いつつ、テラスで音楽を聴きながらサンセット。あつ、芸術の秋を満喫中。 (有泉)
- 最近感じた芸術。ユーミンの「宇宙図書館」最終公演@東京国際フォーラム。素晴らしい良かった。 (古谷)
- 約13年ぶりに直島に、初めて犬島と豊島にも行くことができました。島は賑わい昔ほど素朴さは無くなってしまいましたが、いくつも五感で感動できる体験ができました。 (長澤)

- 演奏会や、音楽コンクールなども多い季節ですね。子どもの演奏は落ち着いて鑑賞とはいきませんが…。 (八田)
- 9月に長女が誕生しました。赤ちゃんはピカソが好きという調査報告があるとか。さすがにまだ早いと思いつつ、どんな芸術に触れさせてあげられるか、考えてしまいます。 (会田)
- 秋風が心地よい時候となりました。お彼岸に稲刈りにと、芸術を楽しむにはあまりに短い季節です。 (上原)
- 年々、季節の境がわからなくなり、いつの間に秋？せめて、芸術を鑑賞し、秋を呼び込もう。全国大会時はイサムノグチ感じてきます。(中澤)

編集 : 公益社団法人日本建築家協会
 関東甲信越支部 広報委員会
 委員長 : 市村宏文
 副委員長 : 長澤 徹
 委員 : 会田友朗・有泉絵美・小山将史・清水裕子・中澤克秀・
 中山 薫・古谷俊一・吉田 満
 編集長 : 長澤 徹
 副編集長 : 小山将史
 編集ワーキングメンバー : 有泉絵美・中山 薫・八田 雅章・立石博巳・
 会田友朗・上原和彦・古谷俊一・吉田 満
 編集・制作 : 南風舎

Bulletin 271 2017 秋号
 発行日 : 平成29年10月15日
 発行人 : 浅尾 悦子
 発行所 : 公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部
 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館
 Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
 印刷 : 株式会社 協進印刷

- JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
- ・ (公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
- ・ 建築家online (一般向け) <http://www.jia-kanto.org/>
- ・ JIA 関東甲信越支部 (会員向け) <http://www.jia-kanto.org/members/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2017

LIXIL

Link to Good Living



50 Years of Shower Toilet

新しい暮らしが生まれるとき、
そこには、LIXILのテクノロジーがある。

これが国産初のシャワートイレ、サニタリイナ61です。

上下水道の整備と便器の洋風化が進む

高度経済成長期の1967年にLIXIL[®]が発売しました。

トイレの進化で、空間を変える、暮らしを変える。

私たちの挑戦は続きます。

※当時の伊奈製陶、後のINAX。

INAX
50th Shower Toilet
50th Anniversary

リクシルのトイレ INAX
国産初シャワートイレ発売50周年

日本の暮らしを変えた
LIXILのものづくり。

50th LIXIL
System Bath
50th Anniversary

システムバス量産開始50周年

50th LIXIL
Door
50th Anniversary

玄関ドア一貫生産開始50周年

50th LIXIL
Window
50th Anniversary

アルミサッシ一貫生産開始50周年

株式会社 LIXIL

お客さま相談センター ☎ 0120-179-400 受付時間：平日 9:00～18:00 土・日・祝日 9:00～17:00

LIXILのテクノロジー & デザイン

検索